



午前
三時
の扉

喜多隆斗

午前三時の扉

死閉

通じゃんせ、通じゃんせ……

どこか遠くの方からその歌は聞こえてきた。どこか異世界の響きにも似ている。

神無月正人はやさしく撫でられるようにして、徐々に現実の世界へと引き戻された。

先ほどまでいた世界は確実に消え去り、現実が体中に染みこんできた。ベッドサイドの時計に目をやると、午前三時だった。

むき出しの腕でベッドの傍らをまさぐった。かすかにぬくもりが残されていた。

歌はまだ聞こえていた。どこか懐かしい童謡。トイレの扉が僅かに開き、隙間から明かりが漏れていた。

正人は寝返りを打つと、再び夢の世界へと急速に落ちていった。

目覚ましが鳴ったのは午前六時。ダブルのベッドには正人だけが横たわっていた。横に寝ていたはずの葉月の姿はない。

寂しいとは思わなかった。先に帰るのはいつものことだし、いつまでもただらだと一緒に過ごすのは好きではなかった。

正人は別段驚くこともなく、身を起こしシャワーを浴びにバスルームへ向かった。

熱い湯が身体を濡らした。同時に昨日の情事のぬくもりをも洗い流していった。熱いシャワーが心も身体も軽くしてくれる。今日も一日が始まる。正人が思い描く通りの。

葉月との関係は半年ほど前から続いていた。

葉月は、正人が部長代理を務める、常陽コミュニケーションズの社長の孫娘であった。常陽コミュニケーションズは最近急速に伸びている、IT系事業のサービス提供会社である。小さいながらも、大手通信事業者ができないような、小回りの利いたサービス提案が売りである。

社長の孫だからといって、葉月は高慢なところがあるわけではない。逆に服装も行動も控えめと言ってよかった。葉月は長く美しい髪がよく似合う、優しくて気が利く女だった。時々、大きな目で正人をじっと見詰めるのだが、どんな思いで見詰めているのかは分からない。ただ、気持ちが安らぐ温かみを持っていた。

昨夜も葉月はベッドの上で、大きな目で正人を見詰め、こんなことを言い出した。

「古代人は、病気の現況は魂にあると信じていたのよ。だから、ひどい病気などになると、魂を入れ替えるために、身体に傷を付けたりしたのよ」

そう言ってペーパーナイフで正人の心臓のあたりを撫でる葉月に、正人は初めて不安を覚えた。

正人はシャワーを浴びながら、撫でられた胸の辺りをさわってみた。

「魂を入れ替えるだって。そんなことできるわけじゃないか」

本気で信じている訳ではないだろうが、葉月は時々そんな無邪気すぎることを言う。そんなところも正人は好きであったが、時々今朝みたいな時にふと、このままでいいのだろうか、と思うことがあった。このまま進むのは、正しいことなのだろうか。

正人は部屋を引き払うと、このホテルに宿泊した時には、いつも利用するカフェに向かった。

カフェはホテルの背面に位置していた。ホテル正面側のレストランであれば、整備された日本庭園と東京の町並みが見えるのだが、カフェは裏の森の風景を見ることができた。森といっても、ホテルの敷地内にある程度のものであるが、九月の熱い日差しを遮り、気持ちの安らぐ木陰を提供していた。

正人はモーニングセットを注文し、テーブルの上に仕事で使っているIBMのノートPCを置いた。

電源を入れると、ハードディスクがかたかたと回る音がした。

正人はこの音が好きだった。一日が思い通りに回転し始める時の音。

OSが立ち上がる。ワンクリックで通信ソフトが会社のサーバーと通信を始める。

「さあ、仕事開始だ」

正人の頭は仕事に集中し始めた。目が電子メールの文字を追い、指がキーボード上をなめらかに滑り、次々と指示を出していく。その指示はアーサー王の剣のごとく狂いはない。部長も専務も、そして社長までが正人の言葉に重きを置く。

正人は学生時代、サッカー一部の部長だった。小柄であるし、足が際だって速い訳でもない。だが、正人の指示はいつだって的確だった。その判断力こそが今の地位と年収を約束する、正人の武器なのであった。

ふと、一つのメールに目がいった。

「会議開催通知。本日十一時より。ビデオ会議にて」

インターネットを経由した、パソコンでカメラからのライブ映像を、双方向にやりとりする会議である。IT全盛の時代だからこそ出来る会議だ。どこにいても、相手の顔を見ながら会議することができる。たとえカフェでも。

正人はちらりと周りを見回した。さすがにカフェの風景がビデオに映るのは、まずいと思った。正人は自前でホテルの小会議室を借りることにした。一時間程度ならたいした金額ではない。

見慣れたウェイトレスがモーニングセットを運んできた。

ウェイトレスは白いブラウスに黒のタイトなスカート。そして黒いエプロン姿であった。襟元には黒の蝶ネクタイを締めている。髪は後ろでポニーテールに纏めている。前髪を額にかけた小柄な顔には、好奇心の強そうな目と、笑うと顔中口になってしまいそうな、大きな口がついていた。見ようによっては、男を食ってしまいそうな口だ。

「いつもご熱心ですね」

ウェイトレスが声をかけてきた。

「まるで、カワセミみたい」

「カワセミ？」

正人は意外な表現に手を止めた。今までに、そんなふうに例えられたことは一度もない。

以前ブルー系のスーツに黄色いネクタイという、実にあでやかな格好で訪れたことがあった。しかし今日はごく普通の濃紺のスーツである。

「カワセミってあの青い綺麗な鳥ですか」

「ええ。でもカワセミって綺麗なだけではないんです。あの小柄な身体で、素早く飛び回り、水

の中の小魚を捕まえるんですよ」

正人はなるほどと思った。青い色がキーワードなのではなく、小柄で素早く動くところが自分と似ているのだ。たしかにそうかも知れないと、正人はほほえみながら、再び指を動かし始めた。

「でも、ちょっと隙が多いかしら」

「隙？」

ウェイトレスはいたずらに微笑むと、お辞儀をして立ち去った。

しばらくメールと格闘してから、トーストにかじり付いた。

ふと目を上げると、先程のウェイトレスの後ろ姿が見えた。引き締まった足首。形のいいヒップにくびれたウエスト。華奢な肩に乗った細い首。

正人は無性に、ウェイトレスの制服をあらあらしく脱がしたくなった。

急にウェイトレスが振り返った。

目をそらす間も無かった。さぞかしいやらしい目つきをしているに違いない。

「たしかに隙がある」

正人は自己嫌悪に陥った。

だがウェイトレスはやさしく、子どもでもたしなめるような表情を見せ、会釈をして立ち去った。

何となくもやもやした気持ちのまま、正人は午前を過ごし、昼前に地下駐車場に向かった。駐車場には、正人の愛車、ポルシェ・カレラが止められている。

黒いカレラは蛍光灯の光を受け、無慈悲に輝いていた。

ところが近づいてみると、カレラのルーフと天井との間に、一匹の蜘蛛が大きな巣を作っていた。

正人は舌打ちし、近くにあった箒で蜘蛛の巣を払うと、荒々しくカレラを発進させた。なんだか煮え切らない一日になりそうな気がした。

何日かして、外回りから戻ると社長に呼ばれた。

社長室に行ってみると、社長が険しい顔をして座っていた。

だが、正人には社長直々におしかりを受けるような、失敗をした記憶はなかった。

「葉月のことなんだが」

社長は開口一番切り出した。

正人と葉月の仲はすでに公認になっていた。

「何日か家を留守にしおった」

さすがに孫娘のこととなると心配にもなるのだろう。だが、いい年をした大人が、二、三日無断外泊にしたからって、付き合っている相手に詰め寄るものだろうか。正人は腹の中で苦笑した。

「旅行でもされたのでしょうか。私も留守というのは初耳です」

「知らないのか」

「存じ上げませんでした」

社長は値踏みするような目で正人を見た。

「家内には、君と会う約束があると言っていたそうだが」

だったらどうしたというのだ。いちいち大人の関係に、口出ししないで欲しいものだ。

「会うには会いましたが、その後のことは存じ上げません」

社長は正人を険のある目つきで見詰めていた。その目は社員を見詰める目つきではなかった。

「そうか」

社長は正人を暫くの間見詰めてから、戻るよう指示をした。

フロアに戻ると、机の上に伝言が置いてあった。

伝言は「地下駐車場で待っている」とだけ記されていた。

伝言を置いたらしい女子社員が、興味深々の目で正人を見詰めていた。

正人は、行き先ボードに外出と書くと、何気ない顔つきで地下駐車場に向かった。

地下駐車場に降りると、カレラのボンネットに葉月が寄りかかっているのが目に入った。正人は舌打ちした。どうして女というのは、車の価値がわからないのだろう。

少し苛つきながら近づくと、それを察したのか、葉月はどこか寂しげな目で正人を見詰めた。

「どうした。社長が心配していたぞ」

葉月は唐突にこう訊いてきた。

「ねえ、私を愛してる？」

「何を言っているんだ」

葉月が正人の腕をつかんで、もう一度同じことを訊いた。

「そりゃあ、愛してるさ」

葉月が正人の目をじっと見据えた。

正人はひどく陳腐な時間が流れていると感じた。ばかばかしい。俺は一体何をしているんだ。

苛々感が募っていく。

正人の気持ちが表情に表れたのだろう。葉月が首を左右に振り、大きなため息をついた。

「何だというんだ」

「ネクタイを外して」

「何だって？」

「ネクタイを外してと言ったの」

言われた通りにすると葉月は、まるで練習でもしたかのように、乱れのない動作でハンドバッグから長細い何かを取り出した。化粧道具にしては大きい。

見ると、漆塗りに螺鈿細工が施されている。しかしどこか古くさい品だ。正人が美術品だろうかと見ていると、葉月がさっと鞘を取り出した。それは小刀であった。僅か数センチだが、磨き込まれた刃がざらりと光った。

「何のつもりだ」

葉月は小刀を振り上げ、正人のシャツを、襟元から胸まで切り裂いた。

「何をやる。危ない」

「こうするしかないのよ」

葉月はそう叫ぶと、小刀を再び振り上げた。

正人は葉月を力一杯押しつけた。

葉月はコンクリートの床に打ち付けられ、反動で小刀が遠くに滑っていった。

「君は狂っている」

床に伏した葉月が、ゆっくりと顔を上げた。

「私が狂っている」

ひどく悲しそうな顔で葉月は呟いた。

「そうだ。狂っている」

非常階段のあたりで、物音がした。どうやら、さっきの女子社員とその仲間たちだろう。一部始終を見ていたに違いない。

正人が非常階段に気を取られている間に、葉月は出口に向かって駆け出していた。追いかける気にもならなかった。ただ、面倒なことになったと思った。社長になんて言い訳をしようと。

そのまま仕事に戻る気にもなれず、正人は飲みに出かける事にした。手近の店で安物のシャツを買い替えた。気持ちが安くなった気がし、ますます苛ついた。そんな気を紛らすために、大学時代の友人を誘い、洋風居酒屋でとりとめもない話をした。

友人と別れてからも、帰宅する気になれず、ふらふらしているうちに、葉月とよく使うホテルの近くまで来ていた。

外資系のホテルなので、バーラウンジもそれなりという噂は聞いたことがあった。正人はホテルのバーラウンジを覗いてみることにした。

ホテルということで、バーは最上階にでもあるのかと思えば地下だった。落ち着いた雰囲気、ゆっくり飲むには丁度いい、静かな時間が流れているバーであった。

カウンターに座ると、驚いたことに、シェーカーを振るのはいつもカフェで見るあのウェイト

レスだった。

隙という言葉が頭をよぎった。安物のシャツなど買うのではなかった。躊躇しているとウェイトレスと目が合った。

「いらっしゃいませ」

ウェイトレスの表情に、値踏みするような気配はなかった。

「君はカフェ担当ではないのかい」

「人手がたりないので、どんなことでもやらされるのです。なにを差し上げましょうか」

「そうだな」

正人は今日一日を振り返り、苦笑を漏らした。

「どうやら、お疲れのようですね。私に選ばせて頂けますか」

いつもならば選択を他人に委ねるようなことはしない。だが今日はもう考えるのも面倒なほど、気持が疲れていた。

「任せるよ」

ウェイトレスはカウンターの奥から、一本のウィスキーを持って戻ってきた。

「お飲みになったことは？」

ラベルを見ると、D i c k e l と記されている。

「知らないな」

素直に答えると、ウェイトレスが教えてくれた。

「疲れた時は、少しきつめの物の方が、早く気持ちをほぐしてくれます。ウィスキーは最適ですね。ウィスキーにも種類はいろいろありますが、これはテネシーウィスキーの一種です。テネシーウィスキーというと、一種類しかないとお思いのお客様も多いようですが、本当は何種類かあるんですよ。これもその一種類です」

正人はグラスを手にとると、ひとくち口に含んでみた。強い香りが口いっぱい広がる。

「ウィスキーも様々な香りが含まれてます。ワインのように、どんな香りが含まれているのか探すのも、一つの楽しみかたですね」

ウェイトレスは言って微笑んだ。

その微笑みに、正人は少しどきりとした。慌ててグラスを口に運ぶ。言われた通り、どんな香りがあるのか探る。甘い香りの中に、どこか懐かしいものが混じっている。気持ちが溶け込むように落ち着いていくのが解った。

三杯のウィスキーを飲んだ。ウィスキーのせい、ウェイトレスのせい、かなり酔った。酔っても今日の話はしなかった。終始仕事の話ばかりを喋っていた。タクシーで帰宅した時には完全にアルコールが回り、酔った勢いでそのままベッドに転がり込んだ。正人は靴下も脱がないまま、眠りに落ちた。

再び、どこかで聞いたような童謡を耳にし、目が覚めた。

すぐに尿意に襲われ、慌ててトイレに駆け込んだ。

電気がついておらず、扉を閉めると真っ暗になった。

慌てて、扉を開けようとしたが、なぜかドアノブが見つからなかった。

正人のマンションは四LDKであったが、トイレはごくふつうの広さしかない。なのに、両手を伸ばしても、何も手に触れるものがなかった。

すぐに足裏感覚がいつもと違うのに気が付いた。ひんやりとしていて、でこぼこしている。まるで地べたに裸足で立った時のような感覚だ。だが、どこか不明確で判然としない。

「どうなってんだ」

足を踏み出してみても、ぶつかる壁すら無かった。いくら酔っていたって、壁が解らなくなる程酔う訳がない。

手がかりを探していると前方にぼつりと人影が現れた。

人影は光を浴びたように浮かび上がって見えた。そして何かから必死に逃げているように見えた。

すぐにそれが誰だか分かった。葉月であった。

葉月は何かに怯え、後ろや辺りを見回していた。

正人が葉月に声を掛けようとした瞬間、葉月の前に何者かが立ちはだかった。

葉月が立ち止まり、悲鳴を上げた。

葉月の前には武者が仁王立ちしていた。

落ち武者のなのか、鬣は解かれ、鎧はあちこちが解れていた。息づかいが荒く、肩が大きく上下していた。腰には大小の刀を差している。しかしなにより武者を印象づけているのは、その身体の大きさだった。その巨軀はまるで牛のようであった。牛のような武者が葉月の前に立ちはだかっている。

葉月が武者を避けるように走り出した。

だが、武者の長く大きな手があっさり葉月を捕らえてしまった。

「葉月」

正人は叫んだ。だが、正人がいくら叫んでも、葉月も武者もまるで正人の存在を知らぬかのようであった。正人は二人の方へ駆けだした。

ところが、いくら駆けても二人との距離は縮まらなかった。宙を搔くように正人の足は空回り続けた。必死になればなるほど、正人の心はある予感に傾いていき、恐れが心を満たしていった。

武者が葉月を押し倒した。

葉月は枯れ葉のように無力だった。

正人もまた無力であった。

武者が葉月に馬乗りになった。

正人は目をそらした。

正人のことが見えるかのように、武者がこちらを向いた。おぞましき顔であった。

額から右の頬にかけて、大きな切り傷が走っていた。眼光は鋭く、かつ残忍であった。大きな鼻にはいくつもの吹き出物が浮かび、めくれ上がった口からは乱杭歯が覗いていた。

獅子だ。正人はそう思った。葉月が獅子に食われる。

武者が髪を振り乱し、その巨軀で葉月にのしかかろうとした瞬間、フェードアウトするように

二人の姿が消えた。

正人は葉月の名を呼びながら、再び走り始めた。

しかしどこまで走っても、闇が広がるばかりで、二人の姿を見つけることはできなかった。ついに正人は暗闇の中でバランスを崩して転んだ。息が切れ、起きあがることができなかった。起きあがろうにも、もはやどちらが上なのかも分からなかった。感覚が狂い始め思考も混乱していた。

ここはどこなんだ。夢なのか。

どうして葉月が、武者に襲われる夢など見なければならぬのか。

正人はいいようのない不安にさいなまれ始めた。そしてついには己が死んだのではないかとさえ思った。会社の駐車場で、葉月に小刀を向けられた時、本当は心臓を貫かれたのではないだろうか。

正人は悲しくなった。一体何が悲しいのかははっきりと分からなかった。自分の死に対してなのか、葉月の不幸に対してなのか、はっきりとしないまま、ただ涙を流した。そして混乱した思考の中で、走馬燈のように過去の幻影をいくつも眺め、やがて意識の闇の中へと沈んでいった。

しばらくして、正人は何者かの力によって、目覚めさせられた。身体に触れられた訳でも、声をかけられた訳でもないが、はっきりと他人の存在を感じた。

正人は武者の顔を思い出し、咄嗟に身構えた。

だが、武者の姿は無かった。

もしかしたら、死者が行くべきところへ連れて行かれるのかもしれない。

そう思うと同時に、何かに身体を引っ張られるような感じがあり、強い閉塞感を感じた。閉塞感の理由はすぐに解った。背中に壁がぶつかった。

そして、強烈な光が差し込んできた。

正人は思わず目を庇った。徐々に目を慣らしながら、光の正体を確認しようとした。

光は細く縦一本の筋であった。

あの世というのはまぶしいところなのだなと思った。

やがて線の幅が広がり、向こうに何かが見えた。

ようやく目が慣れ、それが洗濯機であることが解った。

正人は慌てて手を伸ばした。

扉が。

開いた。

正人は自宅のトイレに座り込んでいた。

外に出てみると、やはり自宅だった。リビングテーブルの上には、正人がトイレに入る前と同じように、IBMのノートPCが無造作に置かれていた。

時計は午前三時を指していた。

結局は酔った末の夢だったのか。

あるいはこれも夢の続きなのか。

正人は葉月のことを思い出し、反射的に携帯電話を取り上げた。だがすぐにテーブルに戻した。

「ありえない」

正人はそうつぶやいてベッドに向かった。横になってみたものの、眠気は訪れず、様々なことを考えているうちに朝になった。

どうにも気持ちを整理できなかった。怪しい夢のこともあるが、葉月との醜態のこともあった。会社に出たくなかった。今日一日くらい家で仕事をしてもらって差し支えないだろう。そう思い、正人はIBMの電源を入れた。

メールを読み始めて正人は血の気が引いていくのを感じた。

山のようにたまったメールの中に、昨日、試験データに関する資料を送付する案件が数件あった。この件は今日でなければならぬ。なぜならば、同じようなサービス案件を他社も手がけている、という情報をすでに入手していた。その他社の試験データが公開されるのが今日なのであった。ここで自社データが勝っていることを証明できれば、契約までは保証されたようなもの

のだ。

試験データの件で、問い合わせが各部門から届いていた。それぞれ、約束の時間を過ぎたがどうなっているのか、という問い合わせである。そして、この関連メールの最終発進者は社長であった。

メールには、この件は他の人間に引き継がせた、とだけ記載されていた。

それ以外にも、約束の時間を過ぎていたといった苦情のメールが数件あった。

正人は慌てて携帯電話を見た。

日付が変わっていた。

正人は丸一日暗闇に閉じこめられていたのだ。あれは夢などではなかったのだ。果たして、正人は夢を見ていたのかもしれないが、現実世界では刻々と時間が刻まれ、時事が進行していた。そして仕事を放り出した正人の評価は、確実に急降下していたのだ。

むろん携帯電話にも着信の記録が山ほど残っていた。

その携帯電話が鳴り出した。

「もしもし、神無月です」

「山科です。調子悪そうだね」

相手は部長だった。

「ご迷惑をおかけしました。でも大丈夫です。すぐに出社して、早急にフォローアップに務めます」

電話の向こうで僅かに言いよどむ雰囲気があった。

「そのことだがね。無理しなくてもいいよ」

「と、言われますと」

「神無月くんもいろいろと大変だろう。後のことは全て鮫島くんに頼んである。彼なら問題もないだろうし」

明らかに正人に問題があったという言い回しだ。鮫島というのは正人の一期後輩にあたる。彼の同期でトップの位置にいる男だ。そして部長の子飼いと噂もある。

「部長。ちょっと待ってください。昨日はプライベートで問題がありまして、少し気が動転していたのかもしれませんが。でももう大丈夫です。やらせてください」

「これは社長の指示なんだよ」

有無を言わせぬ口調だった。

「君は優秀だ。私も期待していた。だからこそ、こんなことで躓きたくないだろう。少しゆっくりしたまえ。休暇の方は私が申請しておいた。一月ほどゆっくりしなさい。追ってまた、連絡が行くだろう」

部長はそう言うとお一方的に電話を切った。

「鮫島だと。ふざけるな」

正人は携帯電話を壁に叩き付けた。

壊れた電話機の部品が正人の額を傷つけた。

「ちくしょう」

怒りの矛先が見つからなかった。

全てはあのトイレのせいに思えた。

正人はトイレの扉を乱暴に開けた。そしてトイレにあったものを見て逆上した。

正人は洗面台の制汗スプレーを手にとると、トイレに向かって吹き出した。その吹き出た霧にライターで火を点けた。

真っ赤な炎が、いつの間に作られたのか、トイレ一面に張られた蜘蛛の巣を焼いた。

中心にいた蜘蛛が、火の玉となって床に落ちた。

同時に頭上からすごい勢いで水が噴き出し始めた。

火災消化用のスプリンクラーが作動したのだ。

正人は水を避けるため、転げるようにして廊下に飛び出した。

すぐに必死の形相のマンション管理人駆けつけてきた。

「大丈夫ですか」

だが正人は答えなかった。

全ての物が水浸しになっていく。IBMもイタリア製のベッドも、正人の生活全てが水に没していく。正人は無言でスプリンクラーの雨を見詰めていた。

「まあ、こんなもんでしょ」

若い保険屋は部屋を見て、一人頷いた。

「二部屋あるだけまだいい方です。それに部屋が燃えてしまった訳ではないので、ほんの一時の辛抱ですから」

そう言って保険屋は印鑑の押された書類をしまい、出ていった。

保険屋と消防署員の前で、正人は嘘をついた。料理に失敗したと言ったのだ。

だが二人が信じていないのは明らかだった。正人は殆ど料理をしないので、ガス台は綺麗なものであった。保険料が支払われる可能性は少ないと言ってよかった。

となれば、この二DKのぼろアパートの代金も実費ということになるが、水没した生活用品代に比べれば屁みたいなものだ。

正人は保険屋の仲介で、マンションから十五分のところに、アパートを借りて貰った。一応鉄筋ではあるが、壁が薄く隣の生活音がよく聞こえた。雨風をしのぐには十分であったが、目の前に僅かであるが、畑があるのには参った。駐車場に置いたカレラは舞い上がる土埃で真っ白になっていた。

することがなかった。買って来たビールを飲みながら、窓の外を眺めた。一間ばかりのベランダの柵に蜘蛛が巣を張っているのが見えた。蜘蛛の巣には二匹の蜻蛉がかかっていた。さすがに今度はアパートが全焼してしまうだろうから、焼き殺したりはしなかった。

夜中に、またあの童謡で目を覚ました。

午前三時だった。

正人はトイレの前まで、導かれるように歩いていった。

頭では、止めておけ、ろくなことにならないぞ、と理解しているのに、どうしても中に入らねばならぬような気がした。右手が勝手にドアノブを握った。

童謡が強く響いた。

次の瞬間、正人は全ての不安を覆い隠されていた。

正人は扉を開けて中に入った。

後ろで扉が勝手に閉まり、全てが暗闇に閉ざされた。歌はもう聞こえなかった。探しても当然のように出口はなかった。

目が慣れてくると、そこは暗闇ではなく、前に壁が見えた。

暗いのは夜だからである。

どうやら崩れかけた建物の中らしかった。広さは六畳ほど。正面には枯れ葉に隠れた台座のようなものが見えた。上を見上げると天井が崩れ落ちていて、黒々とした夜の森が見えた。たぶん小さな寺の本堂であったのだろう。仏像は盗まれたのか。

振り向くと崩れかけた格子の扉が、外へ出て進むべき道を探せ、とでも言わんばかりに揺れていた。正人は今通ってきたはずの扉を開けると外に出た。

三段の階段を下りると、打ち壊された賽銭箱が、のびた雑草に埋もれるように転がっていた。

どこかで気味悪く鳥が鳴いた。

背後には崩れかけた寺が威圧的な黒さの森を従えて建っていた。

正人は本堂の中を調べてみた。予想通り通ってきた扉はどこにも見あたらなかった。

なぜだか解らないが、午前三時になると、正人の部屋のトイレの扉は、正人をどこか別の世界へと導く。導いたきり、次の午前三時まで戻そうとはしない。

次に扉が開くのは、きっと明日の午前三時だ。それまでに、自分は何を見、何を聞くことになるのか。蜘蛛の糸に絡め取られた、あの蜻蛉のように、人生そのものを何者かのに絡め取られていくのか。その答を知りたいと思った。

正人は足早に気味の悪い寺を後にした。

崩れかけた石段を下りきると、細いがしっかりと整備された山道に出た。

月明かりが煌々と道を照らしていた。

右を向いても、左を向いても、道は漆黒の闇に溶け込んでいて、どちらが探し求めるものにつながっているのか解らなかった。正人は無意識に右の道を選んで歩き始めた。

道はうねりながら伸び、やがて川にぶつかった。

正人は川を眺めながら、進むか帰るか考えた。どうせ帰っても何があるわけではない。正人は自嘲気味に笑うと、川に沿って歩き始めた。

しばらく歩くと道は川から外れ、背丈ほどもある草が生い茂る野原にぶつかった。

野原のはずれに一本の木があり、その下に荒れ果てた小屋があった。細い枝と箆で作られた小屋だ。中に人の気配はなかった。正人は箆を潜って中に入ると、藁を敷いただけの床に横になった。

日中起き出して、辺りを見て回った。川と野原以外に何もなく、ここがどこなのか見当もつかなかった。いくら歩いても食べ物を見つけることもできなかった。疲れ果てて小屋に戻った正人は、力無く横になった。空きっ腹を抱えつつも、日が暮れると正人は眠りについた。

夜中に空腹で目が覚めた。

何か食いたかったが、歩いていける距離にコンビニがあるようには思えなかった。見渡す限り、人工の光はどこにもない。

仕方なくごろごろしていると、どこからか馬の蹄の音が聞こえてきた。

人がいる。

正人は慌てて小屋を飛び出した。蹄の音は確実にこちらに近づいているように感じた。蹄の音が大きくなるにつれ、正人はその馬に乗った人物が、信用できるか怪しいと思いはじめた。こんな夜中に一人疾走する者など、どうして信用できるか。

正人は木の陰に身を隠した。

程なくして現れた人物を目の当たりにして、正人は息を飲んだ。

昨日の武者であった。

武者は小屋の前で馬を止め、辺りを警戒し始めた。

正人は木の陰に身を潜めたが、武者が気配を察したかのようにこちらを向いた。

武者はゆっくりと馬を下り、正人の方へと歩いてくる。

見えているのか、見えていないのか、正人が判断に迷っていると、武者は脇差を抜き放った。殺される。

正人は無我夢中で駆けだした。

「待てえ」

武者の恫喝する声に鳥肌が立った。

すぐに武者が追ってきた。後ろから地面を揺らし、迫ってくる。

だが、小柄でも足は正人の方が速かった。徐々に足音が遠ざかっていった。

ところが、安心したのも束の間、すぐに蹄の音が聞こえた。正人は全力で走った。息が切れても心臓が痛くなっても無視した。止まれば殺される。

蹄の音が真後ろまで迫った時、正人はかろうじて山の中に逃げ込んだ。

さすがに山の中までは追ってこなかった。

しばらく山を登ると、何かに引っ張られるような感じがあった。

そのまま、引かれる方向に歩いていくと、崩れた寺を見つけた。

ああ、これで帰れると思った矢先、寺の陰から武者が姿を現した。正人が山に逃げ込んだ時、追いかけてこなかったのは、ここにくることを予期していたに違いなかった。

武者の脇差しが月光を浴びて無慈悲に輝いた。

武者が傷のある頬をゆがめ、にやりと笑った。

「痛くはせぬ。動くな」

正人は逃げられないと思った。

武者は脇差しを振り上げ、奇声を発しながら正人に襲いかかってきた。

ところが、武者はうち捨てられた賽銭箱に蹴躓いた。

今を逃したら生き延びるチャンスは二度と巡ってこないだろう。失神しそうなほどおののいていた正人だったが、気力を振り絞り扉に駆け込んだ。同時に扉を満身の力で閉めた。

扉が閉まる瞬間、武者が脇差しを真っ直ぐ突いてきた。扉を刃が突き抜け、正人の頬を掠めた。

正人は悲鳴を上げて後退したが、武者が扉をうち破って進入してくる気配はなかった。五分近く扉を見詰めていたが、突き刺さった刃が動く気配すらなかった。

正人はそっと扉を開けてみた。

そこには便器が鎮座しているだけだった。それも見たこともない、便器、自宅のそれではなかった。

正人はここはどこなのかと、辺りを見回した。足下は砂まみれ。よく見れば、建物もコンクリート製だった。どうやら公園の公衆トイレらしかった。必ずしも、同じ場所に戻るわけではないようだった。

すぐ脇で金属音がし、正人は飛び上がった。

見ると、扉の刃先が抜け足下に転がっていた。ほんの二十センチほどの刃先であったが、今経験したことが夢ではないことを如実に物語っていた。

刃先は蛍光灯の光を、ぎらりと反射した。

こんなもので斬りかかられたら、ひとたまりもない、と正人は思った。

あれから正人はずっと、目の前に置かれた刃先を眺めていた。空が白み始め、街が活動を始めようとしていた。だが正人はじっと座ったままであった。

刃先は折れたのではなかった。扉が閉まった瞬間、武者のいた世界と切り離されたためか、それこそ刃物で切ったようにきれいに切断されていた。

扉の向こうにどのような運命が待ち受けているのか解らない。ただ、この刃先が何かを暗示している気がした。

午前三時になると、あのどこから聞こえてくるのかわからない童謡で目覚め、そして導かれるように扉を潜ってしまう。正人はホームセンターが開くのを待って、電動ドライバーと木ネジ、そして扉を塞ぐ金具を買った。

帰るとすぐに、トイレの扉を金具とネジで固定し、開かなくした。

扉が完全に固定されると、気持ちが楽になった。少し眠ろうと横になったところで、ふとある疑問が頭をもたげた。

固定するのはトイレだけでいいのだろうか。

正人は玄関と、キッチンとリビングを結ぶ扉の二つも、開かないように金具で固定した。

押入も扉になっていた。ここは造りがやわなので、逆に取り外すことにした。寒い季節でもないことだし、ついでに窓も取り外した。秋の日差しが直接降り注ぐことになるが、いたしかたない。

これで扉という扉は全て固定されるか、外されている。

正人は安心して眠りについた。

目が覚めると夜になっていた。開け放しているせいで夜風が涼しかった。空腹を感じたが、勢いでキッチンへの扉を塞いでしまったので、食料が手に入らなかった。一日くらい食べなかったところで、死にはしないだろう。正人は午前三時が過ぎるのを待つことにした。

午前三時。またあの童謡で目が覚めた。どうやら眠ってしまったらしかった。

正人は当然のように扉のノブを握った。だが扉は開かなかった。見ると、扉自体が金具とネジで固定されていた。どうしてこんなことになっているのかと、正人は苛々し始めた。早く扉を開けなければならない。ネジを外せば扉は開くが、そんな悠長なことをしている暇はない。今すぐ開けなければ扉は閉じてしまうのだ。

正人は何度か力任せに扉を蹴飛ばした。

扉の中央部がへこんだ程度だ。

正人は頭を抱えた。どうすればいいのか。

そこでふと日本刀の刃先のことを思い出した。あれで切り裂いてしまえば、扉は開くかも知れない。

正人は刃先を握った。

途端に痛みで刃先を取りこぼした。指先を鮮血が伝って畳みに滴った。

俺は何をしていたのだろう。

いつの間にか、童謡は聞こえなくなっていた。

時計は午前三時三分を示していた。

扉は閉じたのだ。

正人は畳にへたりこんだ。

突如、どすんという音と共に、扉に先のない日本刀が突き立てられた。

扉は、まだ閉じていなかった。

正人は悲鳴を上げ、開け放ったままの窓から外へ飛び出した。

正人は走った。走りに走って、駅前の交番に駆け込んだ。

警官が怪訝そうな顔で見ている。

自分の部屋を指さしたところで、奥とをつなぐ扉が目に入った。扉のドアノブがゆっくりと回り始めた。

正人は交番を飛び出した。

行くところがなかった。どこへ行っても、扉から逃れることはできない。コンビニにも、ホテルにも、どこにでも扉はある。扉のない建物など存在しないのだ。あらゆる扉が、あの奇妙な世界への入り口に見えた。扉が音を立てるたびに、恐ろしげな武者の姿を連想させた。

正人は当てもなく街を彷徨い、疲れ果てて河川敷の公園に辿り着いた。朝の日差しが公園の簡易トイレを照らしていた。薄汚れた緑の扉が、正人を呼んでいるように見えた。

逃げたかったが、もう一步も動けなかった。正人は土手にごろりと横になると、そのまま眠りに落ちた。

昼過ぎに目が覚めた。

頭はすっきりとしていた。すぐにいいアイデアが浮かんだ。街には扉があふれているが、自然の中には扉はない。

正人はカレラを取りにアパートに戻った。さすがにアパートの近くまで来ると緊張した。付近に武者の気配はなかった。正人はすべるようにカレラに乗り込んだ。まるで自動車道路棒のような気分であったが、エンジンをかけて走り出すと気持ちが落ち着いた。

正人は近くのホームセンターに行き、寝袋と靴を買った。その後食料を買い込み、高速道路のインターに向かった。高速道路に入ると東北に向かってアクセルを踏んだ。

花巻インターを降りるとカレラを遠野街道に向けた。遠野街道をしばらく釜石に向かって走ると、適当な脇道を見つけて乗り入れた。この道がどこにつながっているのかなど、気にも留めなかった。道路脇の民家が無くなったあたりで、さらに細い林道に乗り入れた。小川の上のコンクリート製の橋を渡ると、そこから先は砂利道になった。轍が車体の下部を擦ったが、気にしなかった。小一時間林道を走ったところで道は途切れた。狭い空き地で目にできるものは木々しかなかった。山深い場所らしく都会の音は一切聞こえなかった。近くに沢でもあるのか、木々の間から涼しい風が吹いてきた。

正人はエンジンを切り、缶コーヒーを開けた。コーヒーの香りが車内に広がり、ようやく一息

ついた。

日は傾き始めていた。これから夜がやってくる。そして避けることのできない午前三時がやってくる。だが、ここならば大丈夫だろう。正人はシートに身を埋め、夜が来るのを待った。

午前三時。

またあの童謡が聞こえた。

目を覚まし、慄然とした。

そんなことはあり得なかった。周りには建物など一切ないのだ。

正人はライトを点けてみた。

森の中で何か重たいものを引きずるような音が聞こえた。

その音は前方から、ゆっくりと正人の方に近づいてきた。木々の枝をへし折り、草を踏み分け、耳障りな軋みを響かせて近づいてきた。

カレラのライトが木々の間で動く何かを照らした。木々の隙間から現れたのは、灰色に変色し、ところどころが腐った扉だった。悪質な業者が廃棄したものだだろうか。ドア枠にがたついた蝶番で、ぶら下がるように止まっていた。ドアノブのあるべき場所には、丸い穴が開き、暗く悪意に満ちた闇が覗いて見えた。

ドアは意思があるように、木々を掻き分け、カレラの正面に立ちはだかった。いよいよ子守唄が大きくなり、ドアが軋みながら開き始めた。

正人はカレラのエンジンをかけると、そのまま扉に突進した。

扉は轟音と共に碎け散った。

正人はそのままカレラを回転させると、林道を下り始めた。

それでも童謡はやまなかった。

正人は恐ろしい事実気が付いた。たった今扉を粉碎したのに、それは全く意味がなかったのだ。なぜならばカレラには二枚の扉が付いているのだから。

正人は狂ったように林道を飛ばした。

童謡は止まなかった。

扉が呼んでいた。おいでおいでと。

行かなければならない。衝動にも似た思いが、どこからともなく浮かび上がり、正人の心を一杯にした。

ついに正人はカレラの扉を開け放つと、暗がりの中へと身を躍らせた。

操縦する者を失ったカレラは、ためらうことなく、木々をなぎ倒しながら谷底へと転落した。

正人は月光を浴びた白い背中が、呼吸の度にゆっくりと上下するのを、じっと眺めていた。細い頸から肩にかけての、華奢なつくりが、ガラス細工の子鹿を連想させた。

正人はこの女には迷惑をかけたくないと思った。

正人は扉を抜けてから、ずっと山の中で息を潜めて一日を過ごした。歩き回れば、きっとまたあの武者に見つかるだろうという確信があった。

それにあの武者は、どうやら正人が行き来する扉の場所を把握しているらしかった。

だから、扉を抜けてきたことに気が付かれなければ、戻ることも難しくないだろうと考えたのだ。

だが、いつ見つかるか、いつ殺されるか、といった緊張を抱えたままじっとしているのは、生半可なことではなかった。武者の到来は蹄の音で分るはずなのに、草木が揺れれば身を硬くし、鳥の鳴き声に悲鳴を上げた。

日が落ち、辺りが暗くなると、恐怖は一層増した。ゆらゆらと白く揺らめくものが見えたり、目の前を誰かが駆抜けていくのを見たりしたような気がした。それが現実なのか、幻覚なのか区別がつかなかった。

気が狂いそうだった。

そしてあの、身体を引っ張られるような感覚がついにやってきた。扉が開く時だ。思わず腕時計を見た正人は、信じられない思いだった。

時計は午前三時ではなく、午前二時十分を指していた。

時間が早まっていた。

見間違えかと何度も見直したが、間違いはなかった。このまま時間がずれ始めれば、一時間間隔で扉が開くのもそう先のことではない。

それよりも恐ろしいのは、扉が閉まらなくなったらどうすればよいのだ。あの武者からどうやって逃げればよいのだ。きっとあの武者は、正人がどこへ逃げようとも、あらゆる扉から姿を現すだろう。

正人は完全に混乱していた。時計を激しくぶつけたことなど、まったく気がつかなかった。正人は半狂乱の態で廃寺の扉を潜った。どこへ繋がるかなど考えなかった。ただ、逃げたかった。

扉を潜ると、ひどく埃っぽい場所に出た。顔や手足に蜘蛛の巣がまとわりついた。暗闇で何も見えず、藻掻けば藻掻くほど蜘蛛の糸が絡みついた。まるでアパートのベランダで捕まってしまった蜻蛉のようだ。本当にこのまま蜘蛛の糸に絡め取られてしまいそうで、正人は絶叫しながら表に飛び出した。

すぐに寶銭箱にぶつかり、そのまま湿った土の上に突っ伏した。

そこはやっぱりお堂だった。

戻れない。戻れない。もう自分の世界には戻れない。

正人は分けの分からぬことを口走りながら駆け出した。先ほどとは違っている参道に気づかなかった。ただ、ただこの場から逃げ出したかった。

鳥居を潜り、細い通りに飛び出した所で、やってきた車に激突した。車が徐行していたお陰で、大事には至らなかったが、正人はその場で気を失った。

正人は悪夢が終わったときのように、悲鳴を上げて目覚めた。目に見えぬ何かを払いのけるように、手を左右に振り回した。覚醒するにつれ、自分がどこかの部屋にいることがわかり、気持ちが落ち着いてきた。

目の前に女が立っていた。どこかで見た顔なのだが、誰だかすぐに思い出せなかった。

「気付けになるわ」

と言って女が差し出した。

「さあ飲んで」

正人はグラスを奪い取ると、一気に飲み下そうとし、咳き込んだ。

それはウイスキーだった。

同時に女をどこで見たのか思い出した。ホテルのカフェだ。

「君はたしか……」

「カフェのウェイトレスです。名前は平沢文香と言います」

どうして、という顔をしていたのだろう。文香が説明してくれた。

正人が道路に飛び出した時、ぶつかった車は文香の車だったのだ。そしてここは文香の部屋であった。

「先日も疲れた顔をなさっていましたが、今日はそれ以上ですね」

正人は上目遣いで文香を見た。まだ混乱していて言葉がでなかった。

ただ、本当に疲れていた。

ここにも、午前三時になれば、あの扉はやって来るだろう。逃げる場所など存在しない。正人は反射的に辺りを見回した。

扉、扉、扉。この部屋にも扉はたくさんある。正人は気持ちが切迫していくのを感じた。

叫び出しそうになった時、文香がそっと頬に触れた。

暖かい手だった。

「そんな怖い顔をしないで、シャワーでも浴びてはいかがですか。気持ちが楽になりますよ」

正人はパニックが通り過ぎていくのを感じた。

「ありがとう。でも俺は行かなければならない」

「どこへです」

「わからない。でも行かなきゃならないんだ。行かなきゃ……」

正人が言い淀んでいると、文香が後を引き取った。

「扉がやってくる、ですか」

正人は驚きの表情で文香を見詰めた。

「そんな目で見ないでください。うわごとで言っていたのを、聞いてしまったんです」

正人はたった今まで、文香を押しつけてでも出ていくつもりだった。

だが、頬に残る文香の感触が正人を捕らえて放さなかった。強く、ここにいたいと感じた。たとえ文香に借りを作ることも。

シャワーを浴び、文香の父親のパジャマに着替え、一眠りした。眠っている間に、文香は服を洗ってくれたらしかった。目が覚めると夜だった。闇が迫っていた。ダイニングテーブルには、簡単だが夕食が準備されていた。

「ごめんなさい。先に一人で済ませてしまいました」

「いえ、それより、こんなことまでしていただいて」

「お腹すいているかと思って」

文香はそう言って笑った。屈託のない笑顔が正人の心をやさしく愛撫した。

正人はずっとここにいたい、と痛烈に感じた。その気持ちを振り払うように、首を一つ振ると、黙って頭を下げ、ダイニングテーブルに付いた。

食事が済むと、文香がグラスを正人の前に置いた。グラスには琥珀色の液体が注がれていた。

「これは」

「D i c k e lです。気持ちが安らいだでしょ？」

正人はじっとグラスを見詰めた。

「まだ、吐き出し切れていない気持ちがあるような気がして。もし差し出がましくなければ、私が伺います。何事にも迷いは禁物ですから、心の扉を開いてみてはどうですか」

「迷い」

俺は何を迷っているのだろうか。正人は文香の真っ直ぐな目を見詰め返した。

正人は一口ウィスキーを啜った。

その口を付けたグラスを文香が奪い、同じ場所から一口含んだ。口紅の跡をぬぐいもせず、文香はグラスを正人の前に置いた。そして正人をじっと見詰めた。

その目は戦えと言っていた。

正人の中で何かがゆっくりと回転し始めた。

今までだって、ずっとそうやって道を切り開いて来たじゃないか。あの武者にだって、対抗する手だてはあるはずだ。俺はただ、あの刃に、そして運命に恐れ戦いていただけではないか。

正人はグラスを持ち上げると、一気に飲み干した。

正人がウィスキーを飲み干すのを見届けると、文香がずっと立ち上がった。文香は正人を見詰めたまま、纏めていた髪を解いた。そしてゆっくり廊下を歩き、一枚の扉の前で立ち止まった。文香は正人に背を向けたまま服を脱ぎ始めた。

正人は黙って文香が裸になるのを見ていた。

文香は白い肌を露わにすると、黙って扉の中に消えた。

正人も立ち上がった。もう迷いは無かった。

あの童謡が聞こえた。何度も聞いた童謡。

正人はゆっくりと目を覚ました。

扉を開きたい欲求が高まっていく。同時に、覚醒しつつある頭で、どうやって戦うのかを模索する。力では敵わないだろう。ならば頭を使うしかない。寝返りを打つと胸の傷が痛んだ。抱いた後に文香に付けられたものだ。

「気持ちを証明できる？」

文香はこう聞いてきた。

「できるさ」

「痛みに耐えられる」

「耐えられるさ」

「じゃあ耐えて」

文香は正人の胸に、アルファベットの『N』に似た傷を果物ナイフで刻んだ。

正人は黙ってその痛みに耐えた。武者の刀が恐ろしい物では無くなった気がした。

その文香は横で静かな寝息を立てているはずだ。正人がそっと手を伸ばすと、そこにはかすかなぬくもりだけが残されていた。

文香の姿は無かった。

そして童謡。

正人は慌てて飛び起きた。

「文香」

廊下に出ると、今まさに文香がトイレに足を踏み入れる瞬間だった。

「入るな」

怒鳴ったが遅かった。

文香は一瞬立ち止まり、正人を見詰め返した。

一糸まとわぬ文香。その美しさに、正人は息を飲んだ。正人は全てを忘れ、文香に目を奪われた。

文香はかすかなぬくもりだけを残して扉の中に消えた。

扉が閉まり、正人は現実に立ち返った。

「だめだ。行くな」

正人は駆け寄って乱暴に扉を開けた。その中に文香はいなかった。ただ、便器が鎮座しているだけであった。

「なんでだ。なんでなんだ。どうして俺から全てを奪うんだ」

正人は床を拳で何度も叩いた。叩く度に胸の傷が痛んだ。

その傷が訴えかけてきた。

戦えと。

正人は扉を睨み付け、

「必ず助けてやる」

と呟いた。

正人は黙って文香が洗ってくれた服を身につけた。そして文香のマンションを後にした。後ろは振り返らなかった。

生開

午前五時半。

正人は東京駅にいた。下り東海道本線に乗るためである。

東海道本線に乗ったら、正人は富山に行くつもりであった。富山に行って、正人は文香の両親に会うつもりだった。文香の実家は、たまたま見せてもらった葉書に記されていた。

会って何を話すのかは決めていなかった。ただ、会わねばならぬ気がした。

文香のマンションを出た後、正人は二十四時間営業のインターネット・カフェに行った。ネット検索で何か扉について、情報入手できないかと思ったのだ。

だが、『扉』というキーワードだけでは、情報が多すぎて無意味だ。かといって『午前三時』とか『武者』とか入れてみても、ホラー映画や、小説などの情報がヒットするだけで、まともな情報は一つなかった。探している情報自体が、まともじゃないのだから、仕方がない。

次に、警察に行ってみようかと思ったが、大人の失踪事件には警察は動かない。明日の午前三時には、文香はどこかに戻ってくるはずだ。生きていれば。警察に行くこと自体無意味だ。

知りたいのは、どこの扉に戻ってくるかである。トイレか神社仏閣だとは思うが、それでは探しようがない。大体正人は、文香のことなど何も知らなかった。文香は唯一、両親のことを昨夜話してくれた。正人は当てもないまま、文香の両親に会ってみることにしたのだった。

東京駅から羽田まで移動し、一気に能登空港まで飛んだ。約一時間のフライトであったが、その間、正人はぐっすりと眠った。今までの切迫した日々が嘘のように、リラックスすることができた。

能登空港からタクシーで輪島まで出て、そこから能登半島を左に回り込むように、少し行くと光浦町という小さな町がある。そこが文香の実家のある町である。

文香の実家は小さな民宿を営んでいた。

海沿いの道から僅かに入ったところにあり、海を直接見ることはできない。民宿の前は駐車場になっていて、普段は漁師でもやっているのか、駐車場の端に漁に使うのであろう、小さな船が置かれていた。建物は増改築を繰り返したのか、全体に白で塗られてはいたが、いくつもの小さな家をくっつけたような、不格好な印象であった。民宿の玄関に、手書きの「民宿ひらさわ」というぱっとしない看板が掲げられていた。

扉を潜ると、ソファをいくつか並べただけのロビーがあり、人は誰もいなかった。ソファの脇に、大きな雉の剥製が置かれていた。

正人が呼び鈴を鳴らすと、奥の方で物音がした。

やがて、どたどたと足を鳴らしながら番頭がやってきた。

「いらっしゃいませ」

番頭が頭を下げた際、薄くなった頭頂部が、ロビーの静けさと相まって哀れみを感じさせた。

正人とさほど背丈の変わらない、小柄な番頭は、ずり落ちそうになった眼鏡をかけ直すと、せかせかとした動きで正人の前にスリッパを並べ、愛想笑いを浮かべながらやや中腰の状態で正人を見上げた。

「ご予約のお客様でしょうか。お名前を伺えますか」

「予約ではありません」

番頭は表情を変えず、

「お部屋ならまだ空きがございます。いかが致しましょうか」

正人はポケットから、文香の葉書を取り出すと、番頭に渡した。

番頭は一瞬だけ、時間が止まったような顔つきをしたが、やがて一人合点したように頷き、再び深々と頭を下げた。

「文香のお知り合いでございますか。遠いところからよくおいでになりました。お疲れでしょう、ご案内いたしますので、こちらへどうぞ」

そういう性分なのか、番頭は正人が靴を脱いでもいないのに、部屋の方に二、三歩歩き出した。だが、すぐに止まって振り向くと、もう一度愛想笑いではない笑顔を見せ、

「さあ、どうぞ」

と言った。

部屋は十畳ほどの広さであった。座卓とテレビがあるだけで、輪島の中心街にある老舗旅館などに比べれば、貧相としか言いようがない。窓からは家々の隙間に、僅かに海が見えるのみである。それでも、この民宿の造りからいくと、一番上等の部屋なのかもしれない。

正人は進められるまま、座布団に腰を下ろした。

番頭はお茶を正人の前に置くと、一端、

「しばらくお待ちください」

と言って、部屋を出ていった。

すぐに戻ってきた番頭は、民宿の半纏を脱ぎ、小脇に厚いアルバムを抱えていた。

番頭は畳に正座し、頭をすりつけるほど深く下げると、

「失礼いたします」

と言って、正人の向かいに座った。向き合った時の顔が、番頭のそれから、父親の顔に変わっていた。

「文香の父でございます。良文と申します」

言われてから正人は、なるほど目の辺りがよく似ているな、と思った。

そして、ふっと、どこかで見覚えのある顔だと、正人は思った。

挨拶が終わると、正人は状況を順を追って説明しようとした。しかし、思った以上に説明できることが少なかった。扉の説明を避け、文香が失踪したことだけを述べた。

「どこか、思い当たる場所がないでしょうか」

良文は黙って、ただの一度も口を挟むことなく、正人の言葉を聞いていた。

言うことがなくなって、多少気詰まりを正人が感じ始めたころ、良文は正人の目の前にアルバムを広げ、小さいころの文香の写真を見せ始めた。

「これはね、五歳の時に家の前で取った写真です。三輪車を買ってあげたところ、うれしくて仕方なかったらしくてね。写真を撮った後、乗って道に出ようとしたんですが、初めてだから上手く漕げない。どうやっても道に出られなくて、大泣きしましてね」

良文は頁をめくる。過去を懐かしく思っているのか、目が細くなった。

「これは、お祭りに行った時の写真。どうしても金魚が欲しいって言うんで、金魚掬いをやりましてね。一匹も掬えず、袋に一匹だけもらったのです。その金魚と一緒に寝たいって言い張りましてね。布団はびしょびしょにするし、金魚は畳で水を求めて跳ねるし、大騒ぎですよ」

良文はそう言って、愉快そうに笑った。あまりに屈託のない笑いであった。

「それからね……」

「お父さん。私は文香さんを見つけないんです」

正人が遮ると、良文が見返してきた。穏やかな顔つきをしていた。

「なるほど。さすが文香だ」

良文は一人合点したように、しきりに頷いた。

正人には意味がわからなかった。

「ところで、神無月さん。あなた、お仕事は何をなさっているのでしょうか」

正人は仕事の内容を簡単に説明した。

「ほう。技術屋ですか。でも、最近はトラブルで会社には行かれていない、ということですか」

言ってもいないことを、言い当てられて、正人は困惑した。

「それと、会社以外でもいろいろとトラブル続きなんですか」

「何故、そんなことをおっしゃるんです」

良文が洞察力のありそうな目で、じっと正人を見詰めた。

正人はその顔を見て思い出した。

「あなたは、平沢良文氏。もしかして、あの、通信の父と言われた、平沢良文氏でいらっしゃいますか」

「通信の父かどうかは知りませんが、以前そういった仕事に就いたことはあります」

良文はそう言って、もとの優しい笑顔に戻った。

正人がこの業界に入ったとき、それぞれ独立した通信ネットワークを、いかに融合し、サービスとして運営していくか、といった論文が話題になっていた。それを書いたのが、今正人の目の前に座っている良文であった。正人の記憶している限り、良文は、当時民営化されていなかった電電公社全盛の時代に、無線という技術を応用し、次々に融合型ネットワークに関する論文を発表した。それだけでなく、人、金、技術といった三要素をどう結びつけるかで、企業の方向が大きく変わると、画期的な企業形態に関する著書も出版していた。

しかし、ある時を境に、ぷつぷつとその消息を絶ってしまった。

人々は、電電に食われたと噂していたが、まさか民宿の番頭に収まっていようとは。あのとき良文が提唱した、融合型ネットワーク社会が、いま数十年の年月を経て、現実になっている。

「どうして……」

そこまで言って、正人は言葉を切った。

「こんな辺鄙なところに、ですか」

良文が後を取った。

「まあ、あなたのような、お若い方からみれば、辺鄙なところかもしれません。でも、いいとこ

ろなんですよ。それより」

良文は立ち上がって、襖を開けると手を叩いた。

「一杯やりませんか。今朝、義弟が獲ってきたばかりの、活きのいい魚があるんですよ」

すぐに女将、つまり文香の母が刺身とビールを持ってやってきた。

女将は整った顔立ちをしていたが、どこか男を飲み込んでしまいそうな目をしていた。歳のせいなのか、女将という立場のせいなのかは正人には分からなかった。

女将は慣れた手つきで、刺身の乗った皿を正人の前に置き、ビールの栓を抜いた。

女将の挨拶にも、良文が差し出すビール瓶にも、正人は一切応えなかった。

「お父さん。僕にはやらなければならないことがあります。失礼します」

そう言って、正人は立ち上がった。

良文も女将も、そうですかと頷くばかりで、最後まで笑顔のままだった。

「失礼します」

正人が部屋を出ようとする、良彦が声をかけた。

「神無月さん。あなたはまだまだ大きくなる人だ。今の会社は辞めなさい。辞めてすこし旅でもするといい」

正人は抑えきれずに、怒気を含んだ眼差しを向けた。

良彦はその眼差しを正面で受け止めた。

正人には、その全てを理解した父親のような寛容さが、ひどく神経を刺激し、そのまま頭も下げずに部屋を出た。

時刻は午前二時を指し示していた。壊れたオメガの代わりに買った安物である。

正人は文香の部屋に戻っていた。どこに戻っても同じことなのだが、どうせならばこの部屋が一番ふさわしいのではないかと思った。

正人は昼間のことを考えていた。良文の態度は、失踪してしまった娘の父親としてはおかしいものだった。いくら娘の知り合いが訪ねてきたとはいえ、娘が消えたというのに、ビールや刺身を出すものではないだろう。

それに正人は気になるものを目にしていた。

良文がビールを注ごうと手を伸ばした時、その襟元から僅かに胸が覗いた。胸には何年も前に出来たであろう、傷跡が残されていた。はっきりとは判らなかったが、それは正人の胸の傷に似ているように見えた。

それが一体何を示しているのかは判らない。正人は何か運命のようなものに、自分が引きずられているような気がした。今まで自分が築き上げてきた、あらゆるものが揺れ始めている。そして、万能と信じていた物が、一切役に立たない。

正人は自分の手を見た。

この先、あらゆる局面で、頼りになるのはこの二本の手しかないのだと思った。

正人は時計を見た。あと一時間もしないうちに、扉が開くだろう。文香がその扉から帰ってくる保証はない。いやむしろ、正人は帰ってこないと思っていた。

だから、正人は一つの覚悟をしていた。

帰ってこないなら、助けに行くしかない。

正人はポケットの中の物を握りしめた。

時計が午前三時を指し示したとき、あの、今では聞き慣れてしまった童謡が聞こえた。いよいよやってきた。胸の傷がうずいた。正人は立ち上がった。

この部屋の外では、何にもない時間が普通に流れている。ありきたりの日常。大半の人は眠っている。夜の仕事をしている人もいる。

でも誰もが、日常と称してこのような扉を潜っているのかもしれない。

正人は一分ほど黙ってトイレの扉を見詰めた。文香が帰ってくる様子はない。正人はドアノブに手をかけた。指先が細かく震えていた。扉の向こうに刀を構えた武者の姿が見えるような気がした。正人は目を瞑り、ゆっくりと扉を開いた。

目を開くと真っ暗であった。正人が足を踏み入れると、かさかさとした柔らかい感触が伝わってきた。同時に耳元で何かが嘶き、正人は悲鳴を上げそうになった。

すぐ横に馬の顔があった。扉がつながったのは、どうやらあちらの世界の厩らしかった。

正人は馬を刺激しないよう、そうっと厩を出た。

屋敷は月のない闇の中、黒々と横たわっていた。

正人が中の様子を伺っていると、人が起きだしてくる音がした。慌てて物陰に隠れると、廊下をあつて武者が歩いてきて、厩の様子を覗いていた。

正人は動悸が速まるのを感じた。今まさに、目的の場所へ正人はやって来たのだ。あの武者とは何かの因縁で結ばれているのかも知れない。ということは、武者との戦いを避けることはできないという意味でもある。体中が震えた。これが武者震いかと思った。

正人は武者が寝床へ戻るのを見届け、厩へ戻った。馬が驚かないよう、優しく手綱を引いて、門まで連れて行くと、その尻を思い切り叩いた。

馬が驚いて大きく嘶き、真っ直ぐ闇夜に向かって駆けだした。

正人は暗がりに身を隠して様子を伺った。

すぐに、武者が起き出してきた。厩に愛馬がないのを見ると、武者は訳の分からぬ文句を声高に口走りながら、馬の駆けていった方に駆けだした。

正人はそれを見届けると、屋敷に戻り、屋内に進入した。様子を伺う限り、他に手勢はいないようである。小さなLEDライトで周りを照らす。板張りの床がつややかに光った。壁には槍がかけられている。あの穂先は人間の身体を貫いたことがあるのかもしれない。そう思うと身震いした。

引き戸を開けると廊下が奥へ伸びていた。奥に扉が見えた。ゆっくりと進む。緊張感で息が詰まりそうだった。あの扉の向こうに、文香がいるかも知れない。

扉に手をかけると、静かに開いた。

そこは六畳ほどの小部屋だった。中央にはいろりがあり、炭が柔らかな炎をちらつかせていた。いろりを挟んで正人と向かい合うようにして、ぼろを着た一人の老婆が座っていた。部屋に文香はいなかった。

正人が老婆の様子を伺っていると、

「まぶしい。消してもらえんかの」

と老婆が、驚く様子も見せずに言った。

正人は外を気にしつつ、ライトを消して老婆の向かいに膝を付いた。

「文香という女を捜している。知っているだろう」

老婆は穴蔵のような目を正人に向け、歯のない口でくつくつと笑った。

「その娘はお前の何なんだい」

「大事な人だ」

正人は、老婆の洞窟のような目が、全てを見透かすように見詰めているのが分かった。

「お前の心には、もう一人娘さんがいるようじゃが」

正人は初めて会う老婆に、心を読まれてたじろいだ。だが、悟られぬよう気をつけながら、

「なぜそんなことが言える」

と強い口調で言った。

すると、老婆は「それみたことか」とでも言わんばかりに、くつくつと笑った。

「この年になれば、そんなことは誰にでもわかるもんさ」

「そんなことより、女を知っているんだらう。言ったほうが身のためだぞ」

正人はそう言ってみたが、口を割らせるために、何ができるとも思えなかった。

すっかり正人の心を見抜いてしまったのか、老婆は身動きひとつせず、ただ、

「すぐに会えるさ」

と言って、炭をもてあそび始めた。老婆はそれきり、正人が何を尋ねようとも口を開こうとはしなかった。

ならばと、正人はポケットから小型ナイフを出してみせた。

それを見た老婆が戒めるように、

「使い慣れないものは使わん方がよいぞ」

と言った。

「それより、もうすぐ牛蔵が帰ってくる。早く逃げたほうがいいのじゃないかい」

牛蔵とはあの武者の名らしい。正人は子ども扱いする老婆に、いらだちを感じたが、その名の通り牛のような体躯の武者に、会うのだけは避けたいと思った。正人は一通り屋敷の部屋を覗いてから屋敷を出た。暗がりに身を潜めるとすぐに、本当に馬の蹄の音が聞こえてきた。正人は牛蔵よりも、あの老婆のことが恐ろしくなった。

牛蔵は屋敷に戻ると、馬が見つかったことに安心したのか、それきり動き出す気配は無かった。

正人は静かに屋敷から遠ざかった。行き先は正人が何度か訪れた寺である。午前三時の扉が繋がる場所の一つだ。小さな寺であるが、人一人くらいは隠せるだろう。もし寺に文香がいれば、あとはどこかに身を潜めるだけだが、いなかったら他に思い当たる場所はない。ともかく、今は寺を探すしかない。

正人は寺に着くと先ず本堂を覗いた。本堂といっても、本尊が置ける広さしかない。それに扉は格子になっているため、人を隠し置いても外から見えてしまう。思った通り本堂には人の気配は無かった。

次に宝物殿に向かった。仮小屋程度の大きさであるが、窓は一切無い。正人はここだとあてをつけた。扉に耳を当て、様子を伺った。人の気配はない。そっと扉を開け、ライトで中を照らした。

光の輪の中に転がされた全裸の女の姿が浮かび上がった。

「文香」

正人は慌てて駆け寄った。そして女の肩に手をかけ、初めてそれが文香ではないことに気が付いた。

「お前は」

女が背に隠していた小刀を正人の首にあてがった。

「動かないで」

「葉月。どういふことだ」

首の小刀がひんやりと冷たかった。

「説明してくれ」

葉月はしばらく考えてから話し始めた。

「ホテルで私がいなくなった朝のことを覚えている？」

正人が頷く。

「あの日、私は扉を潜ってこっちへ来ていた。童謡に誘われて、扉を潜ったら、ここに出たのよ。そして目の前に大男が立っていた。牛蔵のことよ。牛蔵は私を見るなり、私を襲おうとしたわ」

正人が暗闇の中で見たことは、現実起こったことだった。正人は牛蔵の行為に憤りを感じた。だが、葉月を失った喪失感はなかった。

「でも私が抵抗すると、すぐに止めて必死に謝った。私は突然のことで混乱していたけど、大きな身体で必死に手を付く牛蔵の姿は、なんだか可愛かった。

牛蔵はそれからお詫びがしたいからと、私を屋敷に連れて帰り、素朴だけど心の籠もったもてなしをしてくれた。牛蔵の母と一緒にね。

その後牛蔵は私になんて言ったと思う？」

葉月が言葉を切り、見詰めてきた。

「わからない」

「あなたが一度も言ってくれなかった言葉。好きだと言ったのよ。好きになったから一緒になって欲しいってね。笑っちゃうでしょ。出会って一日も経っていないのにね」

葉月は無邪気な笑顔を作った。それが、決して不快感を表すものでないことは、正人にもよく分かった。葉月は牛蔵に惚れられ、そしてそれを受け入れている。

「でも、私は躊躇した。なぜだか分かる？」

「それはこんな状況なら、誰だって躊躇するだろう」

「やっぱりあなたは女の何を何も分かっていない。女は状況なんか見ていない。見ているのは心だけ。私は本心を知りたくて、あなたの前に立ったのよ」

正人は唇を噛んだ。会社の駐車場のことを言っているのだ。あのとき、正人は葉月の気持ちに応えられないばかりか、狂っていると叫んだのだ。

突然葉月の顔から表情が落ち、能面のような顔を正人に寄せてきた。

「もうすぐ牛蔵が来るわ。あなたは彼の罠に落ちたのよ。そして魂を入れ替えるの」

葉月が小刀の腹を強く押しつけてきた。

遠くから、蹄の音が近づいてくるのが聞こえた。

正人は素早く計算し、判断を下した。葉月を傷つけるつもりはなかった。

やがて、地面を踏みならしながら、牛蔵がやって来、宝物殿の入り口からその巨体を覗かせた。

正人は気づかれぬよう、右手をポケットに差し込み、中の物を握りしめた。

「手間をかけさせおって。観念するんだな」

牛蔵が近寄ってきた。

葉月の小刀が首から離れた。

正人はゆっくりと牛蔵に向き直ると、間合いを計った。

一瞬、牛蔵が間合いの外で足を止めた。

正人はじっと待った。相手はいやしくも剣の使い手である。何かを気配を感じたのかもしれない。

やがて、牛蔵は危険がないと判断したのか、右手を伸ばして正人を捕らえようとした。

右手が正人の襟首を鷲づかみにしたと同時に、正人はポケットからスタンガンを取り出し、牛蔵の腹に押しつけた。

バチンと青い火花が飛び散って、牛蔵がそのまま後ろに倒れた。

「牛蔵」

葉月が牛蔵に駆け寄った。

「死んではいないだろう。だが、さすがの牛も三万ボルトの電圧には、耐えられなかったようだな」

葉月が怒気を含んだ顔を向けた。だが、その手にはもう小刀は握られていない。あわてて放り出してしまったのだ。

「さあ、知っているんだろう。文香はどこにいるんだ」

葉月が勝ち誇ったように笑った。

「知らないわ」

「知らないことはないだろう」

正人が一歩足を踏み出した瞬間、牛蔵の手が正人の足をすくい上げた。

正人はもんどり打って倒れた。

牛蔵が憤怒の顔で仁王立ちになった。

正人は啞然としつつ、スタンガンをチャージして構えた。

目にも留まらぬ速さで、牛蔵は刀を抜き、スタンガンを真っ二つに切り裂いてしまった。そして返す刀を正人の脇にたたき込んだ。

ほんの一瞬の出来事だった。正人の意識は暗がりへと落ちていった。

篝火の炎が風に靡いていた。

あれから一昼夜が過ぎ、正人は杭に縛り付けられていた。

正人は牛蔵に切られたものと思っていたが、峰打ちだったようだ。左の脇が息を吸うたびに痛んだ。

縛られる前に、牛蔵に何か苦い薬を無理矢理飲まされた。そのせいか、頭がしびれ、まともに物事を考えられなかった。ひどく寒く、篝火の時々爆ぜる音が正人を怯えさせた。

正人のすぐ横には、どういった訳なのか、葉月もまた杭に縛り付けられていた。葉月は正人の方を見ることもなく、黙って目を瞑っていた。

正人たちの前には小さな祭壇が組まれ、護摩の炎がごうごうと燃えさかっていた。風が吹く度に、炎は生き物のように、右に左にと揺れ動いた。

炎の前には老婆が座り、しきりに何かの呪文を、ぶつぶつと呟いていた。老婆は時折、トランス状態にでも陥るのか、身を細かく震わせ、前のめりになったり、のけぞったりしながら、延々と呪文を呟き続けた。

老婆の横には牛蔵が立ち、正人を睨み付けていた。

老婆のリズミカルな呪文が、正人の延髄を刺激し、正人の思考をどんどんと現実から引き離していった。視界の全てがゼリーの中に入ってしまったような、クリアで抵抗感のある映像が頭に流れ込んできた。だが、それは決して不快ではなく、正人は徐々に気持ちが高揚していった。

すぐ横では、葉月もまた、気分が高揚しているのか、身体を小刻みに震わせながら、悦に入った表情を見せていた。葉月は時折、正人が抱いた時にでさえ見せなかった、淫靡な表情で、野太い獣のような声を上げた。

やがて、牛蔵が上半身をはだけた。鍛え上げられた身体に、いくつもの傷が付いていた。篝火の明かりが、筋肉の隆起を克明に描いて見せた。

老婆が立ち上がり、呪文を唱えながら無数の鈴を鳴らし、足を踏みならし始めた。足を鳴らしながら、老婆は手足をリズミカルに動かし、踊りを始めた。

老婆が、足を強く踏む度に、正人は身体が大きく震えた。

同じく、牛蔵もまた身体を震わせた。

四人の意識の融合が起こり始め、正人には自分の見ている映像が、一体誰の目から見たものなのかが分からなくなった。全てが混沌とし、無抵抗で歓喜に満ちていた。

突然、牛蔵が絶叫を放った。同時に、手にしていた小刀を葉月に向けた。

葉月の形のよい胸が、荒い息で上下に揺れていた。

その胸に、牛蔵は刃先を突き立てた。

葉月が悲鳴を上げた。

そして牛蔵は縦、斜め、縦と、正人の胸にあるのと同じ『N』のような形を、葉月の胸に刻み付けた。白い肌を鮮血が伝った。

次に、牛蔵は正人の衣服を切り裂き、小刀を大きく振りかぶった。だが、正人の胸にすでに刻

みが入れているのを目にすると、ゆっくりと刃先で傷をなぞり、狂人めいたゆがんだ笑みを見せた。

最後に牛蔵は、もう一度絶叫し、己の胸に小刀を突き立て、刻みを入れた。

正人の頭の中で、葉月の言葉が急速にふくらみ始め、他の一切を消し去っていった。

『魂の入れ替え』

正人の思考はその言葉に占領され、あらゆる事実がその一言に集約されていった。

魂が入れ替えられる。俺の魂が、牛蔵の魂と入れ替えられる。扉は、そのために開かれたのだ。

正人は一瞬で絶望の奈落へと墜落した。あらゆるものが、黒い霧に覆われ、茨に突き刺されるような感覚が全身を覆った。

老婆がはいよいよ声高に呪文を唱え、鈴を鳴らし、足を踏みならした。

老婆が炎に何かを投げ込むと、巨大な火の玉が夜空に、竜のごとく立ち上った。

「汚れた魂よ去れ。汚れた魂よ去れ。汚れた魂よ去れ」

牛蔵が絶叫し、地面に倒れた。口からは泡を吹いていた。大きく見開かれた目が正人の目と合った。

同時に、思考を牛蔵が占領し始めたような気がした。身体の中に何者かが侵入してくるような感じ。

目の前で踊る老婆が、まるで死に神のように見えた。

その死に神の手が伸び、正人の胸の傷に触れた。その手は熱かった。やがて手が身体にめり込み、心臓を鷲づかみにしている感覚に、正人はもがき抵抗したが、手は熱くなるばかりだった。そして正人は苦しみに絶叫した。

「やめろ、やめろ、やめろー」

やがて老婆は手を引くと、その手を牛蔵の胸に当てた。

牛蔵が絶叫し、もだえ苦しんだ。

正に佳境に入ろうとしていた。

力つき、ぐったりする正人の耳元に、ささやく声があった。

「逃げて」

手が自由になり、正人は地面に倒れ込んだ。

何者かが正人を抱え起こした。

「文香」

「さあ、早く」

立ち上がり、足を踏み出すと左脇がひどく痛んだ。牛蔵の刀で峰打ちを食らったところだ。全身が重く、一步にひどく努力を要した。

老婆が気づき、

「牛蔵。逃がすな」

と激を飛ばした。

牛蔵が億劫そうに身を起こした。

もう一度牛蔵につかまれば、後はない。正人はポケットから包みを取り出すと、火炎の中に投げ込んだ。

途端、投げ込まれた爆竹が次々に炸裂し、火の粉が飛び散った。

老婆が驚いて尻餅をついた。

牛蔵は飛び散る火の粉に、しばらく腕で顔を庇っていたが、二人が逃げ出したことを知ると、怒りの雄叫びを上げた。天地を揺るがすほどの咆哮が辺りに響いた。見開かれた目に炎が映っていた。牛蔵は刀を抜き放つと、正人が縛られていた杭を真っ二つに切り裂いた。そして二人を追って牛のように走り出した。

文香は牛蔵の馬に跨ると、正人を後に乗せ、一気に駆けだした。

「どこへ逃げる」

「もうすぐ扉が開きます」

「帰れるのか」

文香が笑顔で振り向き、頷いた。

作戦と呼べる程のものでは無かった。それでもこうして文香の笑顔と対面できた。正人は文香の腰に回した腕に力を込めた。

文香は鳥居を潜ると、階段をそのまま一気に駆け上がった。

馬の蹄の音が森に響いた。蹄の音を聞きながら、正人は扉が強く自分を引き寄せようとしているのを感じた。

境内まで上がると、本堂の扉が、正人たちを待つように開いていた。

「さあ、中へ」

正人は扉に駆け寄ったが、まだ扉は開ききっていなかった。正人は本堂の扉を一旦閉めた。時計を見ると、午前三時三分前である。あと少し。

ところが、遠くから別の蹄の音が、猛烈な勢いで近づいてくるのが聞こえ、正人は戦慄を覚えた。自分たちにはもう待つしか手段がない。時計を見る、まだ二分以上あった。

「早く、何している。早く開け」

だが、開ききった時の、あの強い吸引力がない。半端な状態ではどこへ飛ばされるかわからない。正人は焦れた。

そんな正人の肩に文香がそっと手を置いた。文香の笑顔には、どこにも陰りは見えなかった。

正人は急激に心が軽くなった。信じよう。きっと間に合う。

残り一分。

蹄の音はもう階段まで達していた。

正人は文香の手を握り、いつでも扉に飛び込めるよう準備した。

牛蔵が境内に躍り出た。

「まてえい」

吸引力が急速に強まっていく。

牛蔵が猛烈な勢いで突進してきた。

正人は扉が開いたのを悟った。

「文香。こっちだ」

牛蔵が刀を抜き放ち、二人の頭上で大きく振りかぶった。

正人が扉を開け放つと、後ろから文香に強く押された。

「文香」

「行って。ここは私がなんとかする」

「待て。君と一緒にじゃないと駄目なんだ」

「着いたら光に従って。後から必ず行く。信じて」

文香はそう言って扉を閉めてしまった。

最後に格子扉を背で押さえる文香の姿が見えた。その向こうには、鬼神の形相の牛蔵。

だが、次の瞬間、正人が目にしているのは、真新しい別の格子扉だった。

「くそう」

正人は格子扉をあらん限りの力で蹴飛ばした。蹴られた扉は大きな音をたてて外れ、境内に転がった。

「何故なんだ。何でなんだよ」

体中が怒りとやりきれなさではち切れそうだった。全てを捨てて文香を助けに行った。なのに、結果は文香に助け出される始末である。己のふがいなさに、本当にやりきれなかった。

それに、いつからなのか、正人はもう文香なしでは、自分の存在意義さえ見いだせなくなっていた。地位がなんだ。恵まれた生活がなんだ。そんなものは無くたって、彼女と一緒にならばそれでいい。

正人は唐突に理解した。良文がなぜ、全てを打って旅館の番頭になってしまったのか。

興奮が収まってくると、急に力が抜け正人は本堂の階段に座り込んでしまった。呆然と境内を眺めていると、掃除をしていないのか、灯籠と階段の間に大きな蜘蛛の巣があるのが見えた。蜘蛛の巣には蜻蛉か何か、蜘蛛の糸に巻き取られた虫が張り付いていた。そこでふと、何故夜中に蜘蛛の巣が見えるのだろうと思い、辺りを見回すと、境内がひどく明るいのに気が付いた。満月が頭上で煌々と輝いていた。満月の明かりがこれほど強いとは知らなかった。

参道脇に敷かれた白い玉砂利が光って見えた。正人はそこで文香の言葉を思い出した。

「光に従え」

ただ、ここで失意に暮れていても何も変わらない。運命によって扉が閉じられたのであれば、その扉をもう一度こじ開けるまでだ。

正人が参道に降りると、奥の院で爆発するように扉がはじけ飛んだ。

牛蔵が立っていた。怒りに燃える目で正人を睨み付け、息を吸う度に盛り上がった肩が上下に動いた。握られた刀が月光を浴びて、無慈悲な光を放っていた。

正人は走った。正人の目にもまた怒りの炎が燃えていた。

ここに牛蔵がいるということの意味を十分に理解していた。怒りの炎で焼き尽くしてやりたいと思った。だが、犬死にする気はなかった。文香のためにも、勝たねばならない。

参道を半ば来たところで、鳥居の向こうに、一台の車が横付けされているのが見えた。どこにでもある、営業用のライトバンである。ドアには「みんしゅく平沢」と書かれているのが見えた。

ドアが開き良文が降り立った。

「乗って」

「何故あなたがここに？」

「説明は後。さあ早く」

正人が飛び込むと、良文がライトバンを急発進させた。タイヤが悲鳴を上げた。同時に牛蔵の刀がボディを掠めた。

スピードが上がり、牛蔵の姿は闇に溶け見えなくなった。

「どういうことです」

「文香にここに来るように言われていました」

正人は視線を落とした。その文香は牛蔵の手にかかった。全身を虚脱感が包んだ。

そんな正人を見て、良文が人懐っこい笑顔を見せた。

「心配いりません。きっと文香は無事ですよ」

何の確証もない言葉に、正人は益々虚ろな気持ちになった。文香が牛蔵の手にかかったという事実が、正人を押しつぶそうとしていた。だが、どこからともなく、怒りの炎が吹き出し、全身を焼くように血がたぎった。このままでは済まない。済まず訳にいかない。

「僕は行かねばなりません」

「どこへです？」

良文の言葉に、心が焦りで空回りしていることに気が付いた。

「きっと私がお力になれる。あなたの疑問にも答えられるかもしれない」

「どうすればいいのです」

「まずは相手を知ることです」

「あなたに何が分かるのですか」

そう怒鳴ってから、正人は良文の胸にも傷があることを思い出した。

「済みません」

良文は軽く頷いた。全てを理解しているというように。そして話し出した。

「江戸の中期におふみという女性がいたことを知っていますか」

「いえ、歴史は得意じゃありません」

「まあ、得意な研究者でもあまり知らないでしょう。妖術師と呼ばれた女性です」

「妖術師」

ライトバンはスピードを落とし、街頭の少ない夜道をゆっくりと進んでいた。

「なんでもおふみは人の魂を、自由に入れ替えられたそうです」

正人は良文に挑みかかるように聞いた。

「あの老婆のことですね。あなたも老婆に会ったのですね」

「会いました」

良文はまるで世間話でもするように、気軽に答えた。

「でも、私は私です。あなたも自分が別人になった気はしないでしょう。魂を入れ替えることなどできませんよ」

まさとはぐったりとシートに身を凭せかけた。自分は自分であって、誰でもない。心臓を捕まれたのは幻覚だったのか。妖術師なら幻覚を見せるくらい簡単だろう。

「それでもおふみは、別の力を持っています」

「過去と未来をつなぐ力ですか」

答えはいらなかった。信じたくもない話だが、胸の傷が夢ではないと告げていた。

「そうです。でも正確には、女の願望を叶える力とでも言うべきでしょうか」

「女の願望？ どういうことです」

言葉を発しかけた良文の顔が急に険しくなり、静かにするように口に指を当てた。

「なんてことだ」

後ろを確認したが、見えるのはのっぺりとした暗闇だけである。だが、耳を澄ますと確かに聞こえた。蹄がアスファルトを蹴る音が。正人は再び、おふみに心臓を捕まれたような気がした。

「扉は開いたままなのか」

良文がスピードを上げた。

車のテールライトの薄明かりに、赤く染まった牛蔵の鬼面が見えた。次の瞬間、サイドミラーが大きな音を立てて割れ、飛び散った。ミラーに矢が刺さっていた。

「平沢さん。もっと速く」

「分かっています」

すると急に車が左右に蛇行し始めた。

「タイヤを射抜かれたらしい」

そんな馬鹿なことがあるだろうか。走っている車のタイヤを射抜くなんてことが、普通出来るはずがない。

だが、現実には牛蔵は距離を詰め始めている。

良文は車を大きく揺らしながら、脇道に乗り入れた。タイヤのせいで車がひどく揺れた。細い砂利道を抜け、開けた場所に出た。空がにわかに青みがかっている。その先に強烈な光を放つ建物がみえた。灯台であった。

良文は灯台の前で車を止めると、正人を急かすように車を降りた。

「こっちです」

良文は灯台の脇の階段を、正人に下るように言った。

「下に義弟の船があります。小さな船なので動かし方はすぐ分かるでしょう。その船で行けるところまで行くのです」

「なぜ船なのです」

「海には扉はないでしょう。大事なものはしばらく扉のないところに逃げることです。奴は扉がある場所なら、どこへでも現れることができる。それではいつかやられる。海で考える時間を稼ぐのです」

正人は階段の錆び付いた手すりに手をかけた。階段はせり出した崖に、まるで空中に飛び出すように造られていた。足を乗せると階段がぎしぎしと揺れた。潮風が足の間を吹き抜け、ひどく心許ない。高い崖が月光を遮り、海も船も見えなかった。ごうごうと波の碎ける音が、正人を永遠の闇に飲み込もうとしているように思えた。

数歩降りたところで良文が来ないことに気が付いた。

「あなたは来ないのですか」

「私は行けません。ここまでです。食料と水は十分です。三日ほど海で過ごし、頃合いをみて陸に上がり、文香の働いていたホテルに行きなさい。ホテルの支配人は私の古い友人です。きっとあなたのお役に立ってくれることでしょう」

正人がもう少し聞きたいことがあると、階段を昇り駆けたとき、良文の後ろに巨大な影が立ち

はだかった。牛蔵であった。

牛蔵は良文もろとも正人に体当たりをしてきた。

「逃げて」

三人の重みで階段が軋んだ。

正人のすぐ上で良文が牛蔵ともみ合っていた。が、良文はすぐに牛蔵の怪力で投げ飛ばされてしまった。今や牛蔵と正人を隔てるものは、潮風のみである。

正人は大きく息を吸い込んだ。胸の傷がうずいている。

「まだまだだ」

正人はそう言うと、身を翻し、階段を駆け下りた。そして踊り場から勢いよく海へと飛び込んだ。

衝撃の後、冷たい水が体中を包んだ。必死に藻掻き、水面に顔を出した。目の前に小型の漁船が停泊していた。正人は船に泳ぎより、なんとかはい上がった。

すると信じられないことに、何かが海に飛び込んだ音が聞こえた。牛蔵に違いなかった。

正人は操舵室に座り、エンジン始動のキーを回した。

ディーゼルのエンジンが、咳き込みながらもなんとか回転し始めた。

牛蔵が泳いで近づいてくるのが分かった。

正人はレバーを引いた。漁船が動き始めたが、すぐに何かに捕まれたように止まった。舳が結ばれたままであるのに気が付いた。レバーを戻し、慌ててロープを外しにかかる。牛蔵はもうそこまで来ていた。

牛蔵が船縁に手を掛けたと同時に、正人はレバーを最大まで引いた。

エンジンがフル稼働し、漁船を力強く動かした。

怪力の牛蔵もディーゼルエンジンには敵わなかった。その手が放れた。牛蔵の姿がみるみる小さくないり、ついに暗闇に飲まれた。

正人は安堵のため息を漏らし、その場にへたり込んだ。

暗闇から牛蔵の雄叫びが聞こえた。正人は牛蔵がいるであろう暗い海を、いつまでも黙って見詰めていた。

もし、正人が舳の上で並んで立つ人物を見たら、驚いたことであろう。海から牛蔵を引き上げたのは、何を隠そう良文であった。

そして今、二人は並んで遠ざかっていく正人を見詰めていた。

翌日、夜になるのを待って、正人は新潟の小さな漁港に入港した。

確かに海に扉は無かった。牛蔵の魔の手から逃れられたことに違いはない。

だが、同時にうち消せない不安が増大していた。

文香は無事なのだろうか。

ただ、闇雲の牛蔵に立ち向かうのも愚かだが、三日も海の上に安穩とはしていられなかった。自分の世界に戻ってこれたのだから、牛蔵に立ち向かう手段もあるはずだ。いざとなれば、警察だって動くだろう。

正人は船を下りると、駅でタクシーを拾い新潟空港まで行き、すぐに大阪まで飛んだ。大阪の伊丹空港から羽田まで最終便で飛び、十時過ぎにホテルに到着した。

フロントで尋ねると、受付の女性が訝しげな表情を隠そうともせず、奥へと支配人を呼びに行った。

正人が、立ち去ったほうが賢明だと考え始めたころ、五十代の貫禄がある支配人がやってきて、笑顔で出迎えた。

「お待ちしておりました。神無月さまですね。全て平沢様から伺っております。私がお案内いたしますしょう」

横で受付嬢が驚いた表情をしていた。

それもその筈である。正人の背広はよれよれを通り越し、ぼろぼろであった。

部屋に通されると、支配人がクローゼットを開いた。そこには一着のモーニングが吊されていた。

「こんな服しかご用意出来なかったのですが、どうぞお着替えください。いまお持ちのお着物はクリーニングに回しますので、袋に入れておいてください。後ほど係の者が、ご用を承りに参りますので、なんなりとお申し付けください」

支配人はごく当たり前の客のように、丁寧にお辞儀をすると、部屋を出ていった。

正人は何も考えず、服を脱ぎ捨てると、頭からシャワーを浴びた。全ての思いがお湯に溶けて流されていく気がした。

シャワーを終えると、ベッドに転がった。疲れが全身を包んだ。これからのことを考えると、とても眠ろうという気にはならなかった。

接客係が来ることを思い出し、モーニングに着替えた。着替え終わったと同時に、呼び鈴が鳴らされた。接客係だ。正人は姿見で身だしなみを確認し、ひどく場違いな服装に苦笑した。

接客係に服を渡してしまうと、今度こそ本当に気持ちがりラックスできた。ベッドに寝ころび大の字になってこれからのことを考えた。

だが、そんな安堵もつかの間、ベッド脇の電話が鳴り響いた。

良文からだろうか、電話に出て、正人は驚きで言葉に詰まった。

父の重治からだった。

「正人元気か」

「親父どうしてここが分かった」

重治は電話の向こうで、静かに笑った。そしていつものように、用件だけを伝えてきた。

「お前が決めたことだ。父さんがどうこう言う問題じゃないと思う。ただお前の口からちゃんと聞いたかった」

「何のことさ」

「本当に平沢さんでいいんだな」

一瞬誰のことを言っているのかわからなかった。そしてようやく文香のことだと理解した。

「いってというのはどういう意味さ」

「愛しているのか」

正人は受話器を握りしめた。ただ、文香の顔が心を埋め尽くしていった。

「ああ、愛している」

「そうか」

重治はそれだけ確認すると、満足したらしく、さっさと電話を切ってしまった。いろいろと問い質したいことはあつただろう。だが、それを口にする重治ではなかった。

正人は何となく、これで親父を安心させてやれるという気がした。波に浚われる砂山のように、心の重しが消えていった。やがて眠気が訪れ、全身を支配していった。正人は深い睡眠の淵へと落ちていった。

いつものように童謡で目を覚ました。

反射的に時計を見た。午前三時だった。

正人は歌のする方を見た。部屋の入り口の扉からだった。身体が勝手に扉を開けようとする。正人は流されるままに扉に手をかけた。扉の向こうに牛蔵がいるとは考えなかった。理由はわからないが、確信さえ抱いていた。

今日まで、いくつもの扉を開いてきた。正確には開かされていた。だが、目の前にあるこの扉を開くのは、誰の意思でもない。己の意思なのだと思った。

正人は強くドアノブを握り締め扉を開いた。

扉の先に牛蔵はいなかった。

淡い色使いの絨毯が敷かれた、廊下が左右に伸びているだけであった。

正人は廊下に踏み出した。童謡は続いていた。その歌を誰が歌っているのか、正人にはもう分かっていた。正人は歌に導かれて廊下を歩き始めた。

廊下の端の厳つい扉を開くと、暗い広間に入った。広間の正面にまた扉があり、歌はその中から聞こえてきた。遮る物もない広間を横切り、扉の前に立った。

この扉を開けば、きっと決着がつく。正人はなんとなくそう思った。正人は全てを失った。その理由がこの先にある。もし、阻む者があれば、粉碎しなければならない。

正人は手を伸ばした。

その手を何者かが掴んだ。

「その扉は、お前が自信の意志で開くのだ。分かっているな」

重治だった。人生の決断を迫る目で見詰めていた。

「どうしてここに」

「お前の選択を見届けるためだ」

正人は重治の目を見返した。

その目に全てを理解したのか、重治は握んだ手を放した。何も言いはしない。お前が決めた道ならば進むがいい、と重治の目が語っていた。

歌が止んだ。

正人は扉を開いた。

正人は星空に飛び込んでしまったような気がした。数百、数千のろうそくが燃え、輝いていた。ろうそくの光を二分するように、真っ直ぐに赤い絨毯が敷かれていた。

左右の光の合間に、幾人もの人が立っていた。良文がいる。牛蔵もいる。牛蔵に寄り添うように葉月もいる。おふみも正人の母もいる。それぞれがみな、その手にキャンドルを持ち、正人を待っていた。

絨毯の先には、純白のウェディングドレスをまとった文香がいた。

正人は揺れる炎の間を、確固とした足取りで進んだ。文香の前までくると、正人は文香の手を取った。

ここが俺の到達点だ。俺はこのために全てを失ったのだ。

文香が満足げに微笑んだ。

「待っていたわ。これであなたは私のもの。永遠に」

もう正人は理解していた。今までの出来事がすべてこのためであったということ。午前三時に扉が開いたことも、牛蔵に襲われたことも、全てが文香の意志によるものだった。

その中で、正人が取った行動が自分の意志によるものだったのか、それとも文香の意志によるものだったのか分からなくなった。

それでも、正人の心は幸福に満たされていた。

「俺は君のもの。永遠に」

正人はみなの前に立つと、社員一人一人の顔を見回した。

「みんな今日までよく頑張ってくれた。小さいながらも、我が社が業績を伸ばしてこれたのも、皆の努力のたまものだ。これからも一層励んで欲しい」

年末の挨拶を終えると、十人程度の社員たちは、三々五々正人に挨拶をして帰っていった。フロアに残っているのは、正人と良文の二人だけだ。

「どうです。社長になった気分は」

「社長なんて柄じゃないです。業務は順調ですがね。それも専務、いえお父さんの力があるからこそです」

「私の力なんて微力に過ぎません。順調に進んでいるのはあなたの力だ。さすが文香が見込んだだけのことはある」

良文はそう言って笑った。

正人はその後、勤めていた会社を正式に退職した。文香との永遠の約束をした後、良文と一緒に会社を創らないか、と持ちかけられたのだ。

良文は、

「あなたさえその気なら、もう一度通信の仕事をやってみるのもいいかと思ひまして」と言って、前線復帰の宣言をしたのだ。

新しい時代の、通信サービスを提唱する会社として、株式会社ストリング・コミュニケーションズを立ち上げ、社長が正人で専務に良文が収まった。ようやく業務が起動に乗り始めたのが、つい最近である。

今日は良文と内輪の忘年会の意味も含め、仕事が上手く回り始めたお祝いをする事になっていた。

正人たちは会社を出ると、目的の小料理屋に向かった。

のれんを潜り店に入ると、店主に挨拶をした。

「元気そうだね」

鋭い眼光が正人に向けられたが、すぐに破顔し、

「いらっしゃい」

と言ったのは牛蔵である。

牛蔵はこちらに残り、小料理屋を営むことになった。もちろん包丁さばきは天下一品である。

牛蔵と共に額に汗し、接客するのは葉月だ。二人は正人の結婚後、同じく結婚した。

葉月が正人に迫ったとき、すでに葉月の心には牛蔵がいたのだ。初めて扉の向こうに行ったときから、牛蔵はすごく葉月にやさしかったのだという。煮え切らない正人より、実直な牛蔵を葉月は選んだのだ。

「かあちゃん。そこでお経なんか読むなよ。お客さんが気味悪がるだろ」

カウンターにはおふみが座る。牛蔵の母である。おふみは正人を見ると、にたりと笑った。

正人は軽く会釈をすると、早々に座敷に逃げ込んだ。真相を知った今でも、おふみだけは苦手

であった。おふみに会うと、胸の傷がうずくのだ。

良文が同じように、座敷に滑り込んできた。右手が胸を押さえていた。

「どうも苦手だね」

良文が言う。

「私もです」

二人は顔を見合わせて笑った。

注文を済ませ、落ち着くと良文がまじめな顔で聞いてきた。

「正人君は私たちを恨んではいないのかい」

正人は一瞬目を伏せ、考えを整理してから言った。

「恨んでなんかいません。得たものの方が多いのですから」

全てはあのカフェから始まった。

正人が葉月と会った後に、必ず利用したカフェで、文香はずっと正人のことを見ていた。

そしてその、恋焦がれる何代も後の孫娘のことを、おふみはさざ波が足に打ち付けるのを感じるように、研ぎ澄まされた能力によって知ったのであろう。

おふみは自分の時代と現代を結ぶ扉を開き、正人を自分の時代に呼び寄せた。

だが、呼び寄せたところで、説得は難しかっただろう。正人は己の心を見誤っていたのだから。テクノロジーに支えられた裕福な暮らしと、社長の孫娘が幸せの要因だと思っていたのだから。

「むしろ感謝さえしています。進むべき道、選ぶべき相手をはっきり認識できたのですから」

おふみは今まで、良文も含めて何人もの男たちに会い、その男たちの心の迷いを見抜いてきた。心の迷いを断ち切るための儀式が、あの儀式であった。胸の傷は、古く迷いのある魂を追い出し、神から賜った汚れ無き魂を収める、という意味の凶案化なのだそう。

その儀式の補助をするのが牛蔵の役目で、目的を理解できない、しようとしぬい男を捕まえ、胸に刻みを入れるために刀を振り回していたのである。

かくして正人も、歴代の男たち同様に、魂を入れ替えられたのである。

入れ替えるといっても、他人の魂とすり替えるなんてことができる筈もない。自分の魂を汚れないものにする。それは昔から日本人が行ってきた行為である。そして今も脈々と受け継がれている。初詣というイベントとして。人々は神社に参拝し、古い魂を収め、汚れ無き魂を受け取り、新たな一年を開始するのである。

「感謝か。確かにあの扉を潜らなかつたら、今の価値観は持てなかつたらうね。ただ」

良文が声を落とした。

「やり方に疑問がないではないがね」

おふみは己の神経が最大限鋭敏になる時間を選んで、正人との扉を開こうとしていた。だが知っていてか知らずしてか、午前三時は丑の刻と寅の刻との境目にあたる。丑の刻は鬼門が開く時間であるが、寅の刻は生命の門が開く時間帯である。だからこそおふみので文香とつながることができるのだ。

だが、始めはうまく扉が繋がらず、正人はどこでもない場所に放り込まれてしまった形である

。あの時の恐怖は忘れられない。

「もし僕に女の子が授かったら、その子も同じように、手に入れたい男をおふみさんのところに送るのでしょうか」

「そりゃあ、代々受け継がれている能力だからね。おふみさんが扉をつなげられるのも、孫の女たちがみな、同じような力を持ち、出口として存在するからだよ。そのおふみさんは今夜帰るそうだ」

正人はおふみを見た。牛蔵と楽しげに話す姿は、どこにでもいる老人だ。

「向こうで一人暮らしですか。寂しくないのですかね」

牛蔵はこちらで葉月と住む気にいるようだ。

「いつでも帰れるから、寂しくないわ。私も向こうで見たいものがたくさんあるし」

小鉢を並べながら葉月が言った。葉月の祖父は、自分の孫娘が時々時代を飛び越えると知ったら、どう思うだろうか。

「女ってのは、強い生き物ですね」

正人が言うと、良文は声を一層落とし、

「女ってのは怖い生き物なのさ」

と言って笑った。

テレビでは大晦日特番が続いている。今年もあと数時間で終わる。

正人は胸の傷の上に手を置いた。ほんのり傷が熱を持った気がした。正人の魂が、傷を介して喋っている気がした。

お前は道を見つけたのだ。お前は役割を知ったのだ。さあ扉を開いて飛び込め、と。

入り口の引き戸が開き、木枯らしと共に女が入ってきた。

女は長い髪を整えると、コートを脱いだ。文香である。お腹の膨らみが目立ち始めた。

文香はすぐに正人を見つけ、小さく手を振った。

「遅れてごめん」

文香が座敷に上がると、良文が座布団を二枚重ねて敷いた。

「さあ、座りなさい。腰を冷やすなよ」

文香は座るとおしぼりで手を拭き、その温かさに思わず微笑んだ。

正人はその笑顔を見て、これでよかったんだと思った。

キャディラック

その店員はぼんやり店の外を眺めていた。

ミルク色の濃密な霧が辺りを取り巻いている。煌々と照らすガソリンスタンドの灯りですら、ほんの数メートル先までしか届かない。店員は自分がビオトープ水槽のなかの小魚になった気持ちになり、一層やる気をなくした。

ただでさえ客が来る時間帯ではない。しかも広大な畑と、拓かれていない丘陵地の間に伸びる一本道。こんな時間帯に走るのはいかれぼんちだと思っていた。

ここはバイト料は安い、暇なのが取り柄だ。だが、暇すぎも困ったものだ。せめてネット回線でも入れてくれればいいのに、オーナーのケチぶりにも困ったものだ。ケータイじゃあちまちましていて面倒だし。

どうせ客がくればセンサーでチャイムがなる。店員はソファールにごろりと横になると、気兼ねなく目を瞑った。

店員がうとうとし始めた時、どこか地を這うような低い音が僅かに耳を刺激した。まるで地獄のドラムみたいなその音は、徐々に大きくなっている。珍しく客が来るかもしれない。店員は僅かに首を持ち上げたが、横になってしまうと最早起きるのが面倒だ。どうせなら通り過ぎればいいのにと考えた。

ほどなくして、低い唸りのようなエンジン音を響かせながら、一台の車が店に乗り入れてきた。ドロドロと腹に響く音からして、大型のアメ車に違いないと店員は思った。だが、留守と分かれば諦めて帰るかもしれない。店員は暫く黙って横になっていた。

エンジン音がぴたりと止まり、辺りを静けさが覆う。濃密な霧と静寂。店員はあの世ってこんな感じなのかと考えた。

ドアの開くラッチ音がする。諦めて帰るつもりは無いようだ。店員は仕方なしにのろのろと起き上がり、大きな欠伸をした。窓の向こうには思った通りのご大層な車が停まっていた。全長が6メートルもありそうな巨大なボディに、これ見よがしのテールフィン。コンバーチブルで、しかも悪趣味にもカラーはレッドだ。よくわからないが、キャディラックか何かなんじゃないかと思う。えらく時代掛かった車だが、どんだけ古いのかも分からない。乗っているヤツのツラを見てみたいと思い、すぐに見られるじゃんと思いついて、店員は一人で大笑いをした。だがすぐに笑いを引っ込めた。

そのツラの主がいつの間にかはめ殺しのガラスの前に立っていた。

いつから立ってるんだ？こいつが歩いてくるのを見たっけ？

ツラの主はこれまた時代掛かっていた。黒革のジャケットにパンツ。そして黒革のブーツときた。当然頭はリーゼントで流行らないサングラスをかけている。ご丁寧な事に鉾のついた革手袋までしている。千年前のロックンローラーだ。

店員は「ロックンローラー」という言葉にまた反応しかけたが、かろうじて笑いを押し込めた。

店を出るとロックンローラーはえらく背が高いことが分かり、店員は僅かにたじろいだ。サングラスをかけていると表情が読めない。だが、怖いとは思わなかった。

「いらっしやいませ」

だがロックンローラーは言葉が通じないのか、喋る気がないのか、ただ黙って上から店員を見下ろしている。

ギターとマイクがないと喋れないんだ。こいつは。

そう思った途端、店員は我慢しきれずに少しだけ吹き出してしまった。横を向いてごまかした。今夜は最高だ。笑いバトルか。今日はバイトに入ってよかった。こいつを餌に、この後はネットで盛り上がるかな。

そんなことを考えていると、ロックンローラーが僅かに首を傾げた。こきこきと乾いた音が響いた。

急速にお楽しみが潮が引いていく。

濃密な霧が灯りの下をくぐり抜け、時間をさらっていく。

店員はこいつを早く片付けたいと強く思った。

「おい」

ロックンローラーが急に声をかけてきた。身なりに会わない高い声。さっきまでの気分なら、耐えきれずに吹き出すところなのに、ちっとも笑う気分になれない。それどころか、ざらついた手で身体を触られるような、不快感が伴う。

そして、こきつという音。

「おい」

ロックンローラーが再び声を掛けてきた。

「はい。何すか」

店員は出来る限り丁寧に言ったつもりだ。これでも。こういうヤツは何を考えているか分からないから。

ロックンローラーの眉が僅かに持ち上がった。馬鹿にされていると思ったのかもしれない。でも、往々にしてロックンローラーはそういうことに疎いはずだ。ことに千年前のロックンローラーなら尚更だ。

「お前、何が得意だ」

妙なことを聞いてくる。歌にでもするのか？ヘイヘイ。お前は何が得意なんだい。人生を何に掛けるのさ。イエーイイイ！

やっぱり楽しい気分にならない。どうなっている。

「何すかねえ。得意な事ってあまりないすね。それよっか、ガスどうするんすか？」

ロックンローラーは返事をしない。気に食わない。そして気味が悪い。霧のせいで時間が止まっている。世界と切り離されている。これじゃあ電波だって飛ばないかもしれない。

急に赤いキャディラックが低い唸りを上げた。誰がアクセルを踏んだんだ？

「すごい車すね。あれ、キャディラックっすか？」

「1959年式のコンバーチブル・クーペだ。そそり立つテールフィンが特徴だ」

珍しくロックンローラーがすぐに応えた。

再びキャディラックが唸りを上げる。まるでせかしているかのようだ。唸りを上げる度に、強力なエンジンの回転でボディがわずかに揺れた。

「エンジンも凄えんだろうな」

店員は何をどう褒めていいかわからなまま、曖昧に呟いた。本心を言えば褒めたくなんかなかった。壊れているのか何だか分からないけど、誰も乗っていないのに唸りを上げる車なんて気味が悪いだけだ。さっさと給油して消え失せて欲しい。

「彼女は6400cc。出力は345馬力だ。だからガソリンを食って仕方ない。今もまた腹をすかせて怒っている」

またキャディラックが唸りを上げる。店員の背筋を悪寒が走り抜けた。確かに怒っているようにも聞こえる。店員は何か言わなきゃいけないと思い、慌てて言葉を継いだ。

「へえ。怒っているだなんて、車好きなんすね」

何言ってるんだ俺。

ロックンローラーは応えない。サングラスに無慈悲な灯りが反射している。

車のことを「彼女」なんて言うヤツにろくなヤツはいない。そうに決まっている。特に車を女と同一視するヤツはろくでなしの上に馬鹿だ。こんな馬鹿なロックンローラーは早く追い返そう。

店員が給油に向かおうとすると、ロックンローラーが畳み掛けるように聞いてきた。

「お前、得意な事は何もないんだな？」

店員は足を止め、怪訝な表情で振り向いた。何なんだ一体。

「無いっすね」

「いいこと無しだな」

「いいこと無しっすね」

店員は、お前ほどじゃないけどな、と思って僅かに笑った。

ロックンローラーが手をゆっくり持ち上げ、サングラスを外した。ロックンローラーは銀色の瞳をしていた。

店員のにやけ顔が凍り付いた。

ロックンローラーの瞳が徐々に赤く染まっていくのが見えた。

「くずめ。お前のようにくずはガソリンになれ」

ラッチ音がしてキャディラックの給油口がひとりでに開いた。

途端に店員は身体が強い力で引っ張られるのを感じた。

何が起こったんだ？

まるで嵐の中に立つみたいに、猛烈な力でキャディラックの方に引き寄せられる。

キャディラックがぐおんぐおんと低く唸る。

店員は給油する時にはエンジンを切れよと思ったのを最後に、給油口に吸い込まれてしまった

。

ロックンローラーはサングラスを掛けると、店内に入りレジの脇にあるピーナッツの袋を手を取った。袋の封がひとりでに切れて開いていく。完全に開いたところで、ロックンローラーは手を突っ込み、ひとつをつまみ上げると口に放り込んだ。

店内ではラジオからレッド・ツェッペリンの「天国への階段」が流れていた。

ロックンローラーはピーナッツを持ったままキャディラックに戻ると、つややかなボディをひと撫でした。キャディラックのドアがひとりでに開き、ロックンローラーが乗り込むと重厚な音を立てて閉まった。

キャディラックは満タンになり満足そうなでろでろというエンジン音を響かせている。そしてひとつ吼えるように唸りを上げてから、ゆっくりと霧の中へと出て行った。濃密な霧はテールフィンの二つの砲弾型テールランプの光をすぐに飲み込んでしまった。

後にはぼんやりと光る、無人のガソリンスタンドだけが残った。

了

午前三時の扉

<http://p.booklog.jp/book/64218>

著者 : kitaryuto775

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kitaryuto775/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64218>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64218>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ